

花巻市博物館

研究紀要

—第21号—

目次

花巻城絵図の時期と諸室の変遷 似内 啓邦 (3)

キリスト教宣教師が記録した明治初期の花巻について 布臺 一郎 (29)

戦争体験談の収集について —戦後80年に際して 松橋 香澄
三浦 友季 (39)

令和8 (2026) 年3月

序

花巻市博物館では、平成16年の開館以来、花巻地方の考古、歴史、美術・工芸を中心とした人文系博物館として、各種資料の収集・保管・調査研究を進めるとともに、企画展や特別展の開催、教育普及活動として出前授業や体験学習など様々な活動を行って参りました。また、令和4年から市史編さん事業に取り組んでおり、さらに幅広い資料の収集・検証が進むものと考えております。

本研究紀要は、こうした博物館活動の基盤となる調査研究の成果を広く紹介するとともに、博物館学及び関連分野の発展に資することを目的としているものです。

本号には、現在本丸跡の発掘調査が行われている花巻城に関する絵図面から、その描かれた時期と本丸御殿諸室の時代変遷を考察した「花巻城絵図の時期と諸室の変遷」、明治初期に花巻で布教活動をしていた外国人宣教師たちの記録を読み解いた「キリスト教宣教師が記録した明治初期の花巻について」、そしてテーマ展「戦後80年 戦争と花巻」の展示活動において収集した、手記や聞き書きをまとめた「戦争体験談の収集について ― 戦後80年に際して」の3編を収録しています。いずれも、日々の調査に根ざした研究成果であり、今後の博物館活動を考える上で有益な示唆を含むものと考えております。

最後になりましたが、本研究紀要を刊行するにあたり、ご協力いただきました皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年3月

花巻市博物館

館長 中村良幸

花巻城絵図の時期と諸室の変遷

花巻市博物館 似内啓邦

1 はじめに

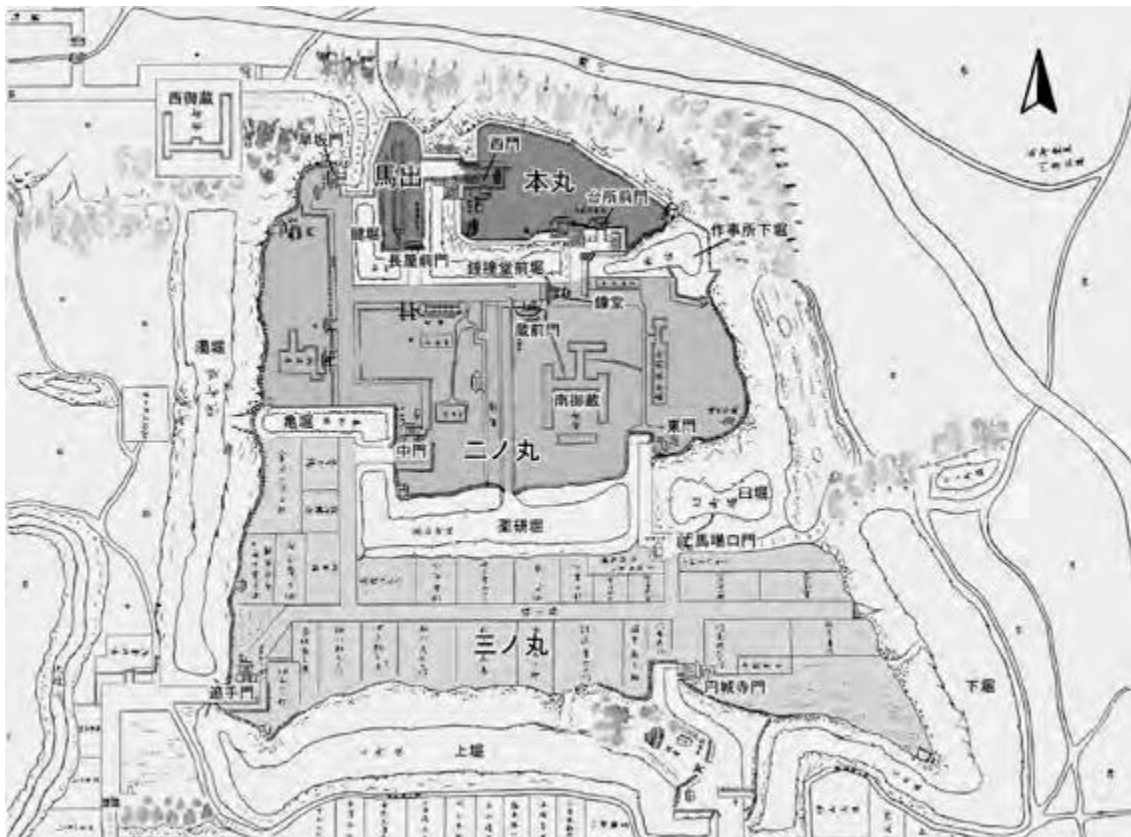
1 本稿の目的

花巻城に関する絵図は数多く知られており、資料名は「花巻城図」・「花巻城下図」・「花巻城本丸図」・「花巻之図」・「花巻城本丸間取(絵)図」など多様であり、これまでの企画展や研究により、詳細な検討が加えられている。ここでは、個々の絵図は各々特徴があることから、比較によって特徴を抽出して作成年代まで分析するものである。

2 対象とした史資料

本稿では、花巻城に関する絵図の所在を再確認する目的も兼ねた。その結果、花巻市博物館11点、もりおか歴史文化館3点、岩手県立博物館1点、岩手県立図書館1点、十和田市郷土館1点の17点と宗教法人天巖山宗青寺と個人が所有している2点を加えた計19点について、絵図の特徴と諸施設の名称の変遷から景観年代と作成年代を検討した¹⁾。

なお、岩手県立博物館、十和田市郷土館、個人の資料は写真の分析に拠った。



第1図 花巻城全体図(もりおか歴史文化館所蔵「花巻城図」に加筆)

2 花巻城の概要

1 花巻城の概要

花巻城は盛岡藩の支城であり、城(郡)代が治める。この地は「前九年の役」の際に安倍頼時が築いた城柵があったとも伝えられ、16世紀中頃には稗貫氏が鳥谷ヶ崎城を築いて居城とし、さらに天正19(1591)年に盛岡藩初代南部信直の家臣である北秀愛が八千石を賜わり城代として入って、城地の改修とともに名称を花巻城に改めたと伝えられる。

秀愛の死去後は、父の北信愛が城主となり、さらに信愛の死後に城主となった南部政直の代に近世城郭として整備したと伝えられる。慶長20(1615)年に幕府が定めた一国一城令の中で盛岡藩は花巻城と鍋倉城を有していることから極めて稀な存在である²⁾。

2 花巻城の規模と構造

花巻城は、花巻市街地のほぼ中央に位置する。慶長2・3(1597・1598)年、盛岡に築城を開始した南部氏の抱城のひとつとして機能し、明治6(1873)年に廃城となるまで存続した。城の立地は、北上川と豊沢川の開削によって形成された河岸段丘上に築かれており、規模は南北約500m、東西700m、面積約236,700㎡である。北側の崖を除いて東側から南側にかけて下堀、上堀と西側の「濁堀」によって城域が区画されている。

「本丸」は段丘北端の中央にあつて、稗貫郡と和賀郡を統治する行政機能と仙台領を牽制するための軍事機能を持ち合わせるとともに、藩主が参勤途上の際の宿泊所であった。「本丸」には御殿のほか「菱御櫓」や「西口番所」と八幡宮・弁財天・稲荷社を祀った「三社堂」がある³⁾。本丸内に至る主な出入口は西側の「西御門」と南側の「御台所前御門」の二ヶ所である⁴⁾。なお本丸の北側から東側にかけては急峻な崖となるが、西側から南側にかけて堀を巡らし堀を隔てた西側には長屋を取り込む「馬出」曲輪がある。

「二ノ丸」は「本丸」の南側から西側に位置する。本丸の西側には城(郡)代が居住して執務する「御役屋」、南側は中堀を隔てた東側には統治する郡内で収穫された穀物を取める「南御蔵」のほか、「御作事所」、「煙硝御蔵」、「鐘楼」がある。中堀の西側には「稽古場」や「御厩」、「馬場」など御給人らの教練機能を持たせていた。主な入口は南東方の「東御門」、西側の「中御門」、北側の「御蔵前御門」、西側の「早坂門」の四ヶ所がある。なお、本丸の南側は「臼堀」と「薬研堀」、「亀堀」で区画されている。

「三ノ丸」は「二ノ丸」の南側に位置する。曲輪の中は街路である「館小路」の南北に50石以下から100石前後の禄高の御給人が居住していた。曲輪への入口は「御厩」に隣接して冠木門があるが、主要な門としては、曲輪西側の「追手御門」と南東方の「円城寺御門」、さらには北東方に「馬場口門」の三ヶ所が存在した。

現在、花巻城跡の本丸跡は都市公園「鳥谷ヶ崎公園」となり、昭和63(1988)年9月1日付で花巻市の史跡に指定され、平成7(1995)年に「西御門」と枳形が復元されている。二ノ丸は中堀が埋め立てられて、西端の城代屋敷跡は花巻小学校となっており、稽古場は同小学校の校庭、「南御蔵」跡には武徳殿が建てられている。また、三ノ丸西側には花巻市役所、裁判所、体育館が建てられ、東側の御給人の屋敷は宅地となっているものの、曲輪内の平地、土塁、堀の地形が良好に残されている。なお、現在に残る建造物の遺構としては市有形文化財「円城寺門」があり、県有形文化財指定の時鐘堂の「鐘」がある。

3 花巻城の普及活動と研究

1 普及活動

花巻城の建物は、明治6(1873)年11月に民間に払い下げられて解体された。城の跡地は陸軍省の管轄であるが、その管理は岩手県が行って払い下げの手続きの中で徐々に郡役所などの公共施設や民間の所有に変わっていったが、一方で明治期には荒廃した土地もみられ、城下町花巻の象徴であった花巻城は近代化への歴史の中で、次第に城郭の面影は薄れて行った。そうした中で、昭和50(1975)年代以降、観光や教育的側面から花巻城の歴史を広報しようとする動きが市の観光部局や教育委員会から始まり、平成3(1991)年に花巻市博物館建設準備室(平成16(2004)年開館)が設置された。また同年同月には花巻新渡戸記念館が開館すると花巻城に関する企画展が開催されるようになる。

さらに、平成23(2011)年に花巻市総合文化財センターが開館すると、市内の遺跡に関する調査と研究が充実することになった。特に花巻城跡は発掘調査が計画的かつ継続的に実施されるようになったことにより、絵図や古文書などの史資料からしか伺い知ることが出来なかった城内の実態が明らかになりつつある。

2 花巻城に関する研究

花巻城の城代であり重臣であった北家が知行地であった花巻や盛岡での執務日記として記録した「御次留書帳」や御給人に関する論考がある。小原氏は嘉永3(1850)年と安政3(1856)年に花巻城下に居住した御給人名簿を作成し、各家の変遷と禄高を探っている⁵⁾。また「花巻城代日誌概略年表」は「御次留書帳」の記録を時系列にまとめた⁶⁾。さらに、明和9(1772)年・安永3(1774)年・安永5(1776)年・天明3(1783)年・寛政12(1800)年での花巻と参勤交代との関係を「南部侯道中書留」などの記載から分析し⁷⁾、三ノ丸の発掘調査の成果に基づいた遺構や遺物の検討も行われている^{8・9・11)}。

また、近年の研究としては、中村氏による「花巻城本丸御殿の建築空間」に関する論考がある^{10・12)}。論考は、既往研究と資料概要や盛岡藩の地方統制の運営実態について、文献の分析から稗貫郡や和賀郡などの地方支配のあり方を整理し、建築の立場から「花巻城本丸図」、「花巻城本丸御殿図」さらには、「花巻御城図—御本丸間取絵図」などの絵図の比較検討を行い、その諸室と空間構成から本丸御殿の機能について分析を行っており、花巻城の機能の実態に迫ろうとするものである。

4 花巻城に関する絵図の概要

本稿では、次に記す資料のうち、(1)～(11)と(17)・(18)は所蔵・収蔵元の資料名を使用した¹⁾が、(12)～(16)と(19)の掛軸などの資料には花巻城全体図と本丸御殿図が描かれ、それぞれの表題があるものの資料名としてはまったく異なる名称が付されている。このことから、本稿では資料に付された上下2点の表題を重視して上の図と下の図を合わせて「花巻御城図—御本丸間取絵図」とし、本来の資料名を()内に表示している。

資料の分析項目は、ア 全体、イ 特徴、ウ 景観年代、エ 作成年代とし、絵図の順序は景観年代として、寄贈や購入による所蔵や寄託や借り受けによる収蔵元、同じく所蔵・収蔵番号、受入区分を明示した。寸法は天地を正位として本紙の縦×横の数値である。

1 花巻城に関する絵図

(1) 「花巻城下図（花巻古図）」（第2図）

花巻市博物館所蔵 13316 購入資料 56.0×44.3cm

- ア 全体：松田弥兵衛尚次が享保4（1719）年に花巻城第46代郡代に赴任する際に持参したと伝えられる絵図である。なお、松田は51代の郡代も務める²⁾。絵図はやや厚手の美濃紙に描かれており、額装されているものの、本来は折図である。
- イ 特徴：城と南側の城下のほか、北側は瀬川（北上古川）、城の東は北上川と合流する瀬川に高木村、小舟渡、八幡堂の文字が記載されている。南側は豊沢川までで中小路、里川口。西側にはカチ町から南万丁目村、北万丁目村の御足軽町まで描かれる。本丸は「御台所御門」（後代の「前」は付かない）、「西御門」、「菱矢倉」（「櫓」ではない）のほか本丸と南側の濁堀と薬研堀の規模が書き込まれている。二ノ丸中堀の西側は「中御門」、「御馬屋」。中堀の東側は「不明御門」、「御蔵前御門」、「新御蔵」、「御土蔵」、「御破損小屋」の文字。焰硝蔵は絵だけで二ノ丸と南側の堀の規模が書き込まれ、三ノ丸は館小路の街路と諸士の住居の配置と氏名が書き込まれる。西側の「大手」門と南側の「円城寺」は文字と絵で表現される。
- ウ 景観年代：周囲の河道と地名や丁（町）の名称。「矢倉」、「破損小屋」などの名称や居住する御給人の氏名は江戸時代中期の特徴を有する。
- エ 作成年代：三ノ丸居住の多くの御給人の氏名から伊藤所左衛門から庄左衛門へ名を改めた正徳5（1715）年5月15日から長沼九一郎が治五右衛門へ名を改める享保2（1717）年5月13日までの2年間で主体である。ただし、金屋甚十郎は明和3（1766）年の記事があり、時代が合わないという課題が残されている。

(2) 「花巻城本丸図」（第3図）

花巻市博物館収蔵 28011 寄託資料 43.4×75.4cm

- ア 全体：薄手の和紙に描かれた本丸内だけの御殿建物の折図である。諸室の間取と名称が描かれているが、南側の台所前門や西側の台所は省略されており描かれていない。なお、従来使用されてきた「花巻城本丸見取図」の呼称はない。
- イ 特徴：臺所門は「御入口」のほか「御用ノ間」、「御鷹居間」、「御鑓之間」、「御鷹居間」、「御風呂屋」、藩主の寝室である「御床・御床ノ間」。「クラカリノ間」、「御スキヤ」、「御老中席」、「ガンノ間」、「御城代席」、「御茶油所（ママ）」、「御物書所」、「御目付所」、「御納戸」、「上御料理ノ間」、西門は「西入口」がある。また、藩主の入り口である「御玄関」のほか「御廣間」があり、藩主の居室である「松御間」。諸士との評定を行う「菊御間」。次間や控間である「桐御間」、「御臺所」、「御臺所口」、「御臺所（爐）」、「御廊下」、「御臺所奉行詰所」などがある。
- ウ 景観年代：註釈に「文化七年三月 勝木藤藏方持参 御前江入部二候 御絵図面」、とあるように、花巻城91代城代²⁾の勝木藤藏が藩主利済の花巻城登城に際して（藩に）持参した旨が書かれた図面と理解できる²⁾。
- エ 作成年代：註釈から江戸時代後期の文化7（1810）年3月の作成として扱った。なお、本図は盛岡城本丸御殿の大工職人関係資料に見る指図に似る。

(3) 「花巻城本丸御殿図」(第4図)

花巻市博物館収蔵 00072(仮) 寄託資料 56.3×131.0cm

- ア 全体：花巻御給人で、学校「揆奮場」を設立した松川滋安の末裔に伝わった折図である。これまでの本丸の発掘調査の成果から(2)の「花巻城本丸図」に後続する時期に位置付けられる。(2)以降、文化13(1816)年にかけて御殿の改修記録を裏付ける絵図と考えられる。「花巻城本丸図」の東半部のうち、御側衆が控える空間と台所の諸室が建物軸線を大きく変え、各諸室の名称も変更している。
- イ 特徴：台所門と西門の記載はない。「御用所」、「御金所」、「石爐ノ間」、「御代官留ノ間」、「御代物所」、「御鍵ノ間」、「御湯處」、「おふろ」、「釜」、藩主の居室である「御末」。「中庭」、「クラガリノ間」、「御納戸」があり、この「御納戸」に隣接しての東側に雪隠や棧敷とみられる区画が設けられている。また「休息ノ間」、「御茶ノ間」、「御物書所」、「拾三間廊下」、「御配膳ノ間」、「上御料理ノ間」、「御老中席」、「御玄関」、「表御番所」、藩主の「御居間」がある。盛岡城二ノ丸でも評定を行う「菊ノ間」がある。南端の「御目付所」、「御納戸」は「御配膳ノ間」に変わり、新たに「御老中席」が設けられる特徴がある。さらに「桐ノ間」、「御臺所」、「御廊下」、「物置・スミ部ヤ」があり、東端の台所も軸線を変えた「下御廊下・水ヤ・味噌蔵」などがある。
- ウ 景観年代：文化7(1810)年から改修記事が散見される文化13(1816)年3月頃。
- エ 作成年代：江戸時代後期 文化7(1810)年から文化13(1816)年3月頃までの4年間の年代が想定される。

(4) 「花巻城下図」(第5図)

もりおか歴史文化館所蔵 03629(史35-3-044) 南部家旧蔵 156.0×116.0cm

- ア 全体：盛岡藩に伝わった絵図で、折図である。黄褐色ぎみの厚手の用紙に城全体と周囲の河川とともに南側の中小路の城下が描かれており、表題には「花巻城下図 文政五」とある。
- イ 特徴：花巻城北側の北上川について、註釈に「北上古川」とあり、瀬川から北上川(新川)の流路の切り替えは「寛文年中御郡代四戸金左衛門北上川洪水之度毎御本丸墨地崩ル、付新川ヲ掘テ水害ヲ除クト云」と記されている。また城西側の足軽町が同心町に変わり、一日市町、坂下町、カキ町の町屋へ広がる様子が伺える。
- ウ 景観年代：本丸は、「御臺所前御門」、「西御門」、「三社」、「菱御櫓」、「鐘櫓」、「土手」が書かれているが、ほかの施設の表現はない。二ノ丸の中堀西側は「中御門」、「御厩」、「御稽古所」、「馬場」があり、東側には「御蔵前御門」、「不明御門」、「新御蔵」、「御囲殻蔵」、「御作事小屋」が書かれているが、その他の詳細は記載されていない。三ノ丸の西側の大手の名称は「追手」に変わり、「圓城寺御門」、「観音寺」が文字と図で描かれている。
- エ 作成年代：三ノ丸に居住する御給人の神山繁太は文政3(1820)年10月に親幸右衛門から跡式を継いで以降から絵図の表題である文政5(1822)年頃までのおよそ2年間の様子を描いている。

(5)「花巻城下図」(第6図)

個人所蔵 無番 101.2×69.4cm

- ア 全体：花巻城と南西方や南方の桜木町、末広町、双葉町や北西方の愛宕町、一日市町、坂本町、四日町が描かれており、北側に隣接する瀬川の切り替えによって新しく居住地が拡大していく様子が見て取れる。図の北西方には「南部萬歳記」から引用した城地の安倍頼時以降の城地の来歴が書かれた註釈がある。写真データによって分析したが、全体に不明瞭な文字は判読し難い。
- イ 特徴：本丸は「御臺所前御門」と「西御門」のほかは記述がない。二ノ丸は中堀の西側は「中御門」、「御厩」、「稽古所」。東側は「御蔵前御門」、「不明御門文政九戌年ヨリ東御門ト唱」とある。また、「新蔵」、「御囲穀蔵」、「御作事所」などが表記されている。三ノ丸：西側は「追手」、南側には「エン城寺御門」が記され、曲輪内には路と「館丁」の文字が書き込まれている。
- ウ 景観年代：「不明御門文政九戌年ヨリ東御門ト唱」の記述から江戸時代後期の文政9(1826)年以降の特徴が読み取れるものの、図そのものは写か模写の可能性はある。
- エ 作成年代：絵図の特徴は江戸時代後期の特徴があるが、絵図の北西方に記された註釈文には、ひらがなが多用されており、また「は」を「ハ」、「れ」、「も」などの助詞や旧字体の用法やルビの特徴、さらに「退治のため下向」など、ひらがなを多用している。絵図内の文字の書体は注釈文と酷似している。このことから太平洋戦争後に書かれたことが考えられる。この絵図は複数存在している。

(6)「花巻城古城図」(第7図)

花巻市博物館所蔵 36638 寄贈資料 52.5×37.9cm

- ア 全体：薄紙に書かれた折図であることから写の可能性はある。絵図の南東隅は欠損している。本稿の絵図の中では唯一「古城」を冠する資料名である。
- イ 特徴：測量図ではなくラフな略図となっており、花巻城は本丸、二ノ丸、三ノ丸だけで、城下は描かれていない。城の北側に西方から東方に流れる瀬川の河道が描かれている。本図の西方に注釈文があり、老中・御用人の参勤の際の通用門や登城経路が記されている。本丸は「御臺所前御門」、「西御門」のほか北側に新たに「御入口御門」があり、本丸御殿は「御玄関」だけが記されている。二ノ丸は中堀の西側には「中御門 御入口」、「コシカケ」が記され、中央に朱文字による文があるが薄くなっており判読できない。東側には「御蔵前御門」、「東御門」、「時鐘」、「御囲穀御蔵」、「南御蔵」が記されている。三ノ丸は「追手御門」、「圓城寺御門」、「観音堂」、「館小路」の文字が記されている。
- ウ 景観年代：絵図の西方から北西方にこの絵図が描かれた来歴があり、その中に天保14(1843)年とある。この年代を絵図年代の上限とみた場合、花巻城の施設名称の変遷からも矛盾はしていない。
- エ 作成年代：二ノ丸の「新御蔵」から「南御蔵」へと名称を変える安政2(1855)年頃以降の可能性はある。

(7)「花巻之図」(第8図)

花巻市博物館収蔵 31431 寄託資料 116.4×105.8cm

- ア 全体：「嘉永3(1850)年10月 上山廣淵 写」とあり、折図となっている。
- イ 特徴：花巻城を中心として東・西・南・北の城下が広範囲に描かれている。特に西方の外吹張足輕組丁、南西の新町、鍛冶町。北西の一日市町、四日町、愛宕丁方面が整備されていく。絵図の年代は、上限が三ノ丸に居住した伊藤大八が跡式を継いだ嘉永3(1850)年6月24日から絵図の表題である同年10月を下限とみる。本丸は「御臺所前御門」、「西御門」、「三社」、「菱御矢倉」が絵とともに書き込まれている。二ノ丸は「二ノ郭」と記され、中堀の西側には「中御門」、「石井伊賀守古屋舗 伊賀屋敷ト云」、「御作事奉行 役屋」、「御厩」が記され、冠木門2棟、柵が絵で表されている。東側は「御蔵前御門」、「不明御門」、「今東御門ト唱通用有之」、「鐘堂」、「新御蔵」、「御囿蔵」、「御作事所」が記され、堀や柵は絵で描かれている。三ノ丸は「追手御門」、「圓城寺御門」、「観音」、「鳥谷ヶ崎」と居住者が記され、描かれた年代の想定ができる。
- ウ 景観年代：三ノ丸の御給人伊藤大八の経歴から嘉永3(1850)年6月24日以降である。また、註釈にある「南万丁目村 嘉永三庚戌年十月吉日 上山廣淵 写之」とあることから、この間の約4ヶ月間の様子を伝えている。
- エ 作成年代：写とあるが、盛岡藩家老席日記「雑書」に散見する御給人の経歴と註釈から嘉永3年と考えられる。なお、「鳥谷ヶ崎」は「鳥屋ヶ崎」に変わっている。

(8)「花牧 鳥屋ヶ崎城絵図」(第9図)

花巻市博物館所蔵 14878 寄贈資料 60.7×48.3cm

- ア 全体：軸装になっており、江戸時代後期(幕末)の嘉永7(1854、安政1)年4月14日藤本融之丞の模写と註釈がある。なお藤本は謙信流軍学者、所謂兵法家である。
- イ 特徴：花巻城を中心として東・西・南・北の城下が広範囲に描かれており、城の四周の北上川、瀬川、新川、豊沢川の河川が描かれている。
- (7)「花巻之図」と同様に西方の吹張丁、御同心丁、坂本丁、一日市町や南西や北西の鍛冶町などの町屋が描かれている。本図の註釈には、「藤本融之丞 嘉永七甲寅歳四月十四日模写之」とあり、さらに「日本傳権征軍師 真精剛弼 藤本融之丞 景機之印」の手書の印がある。絵図の精度は高くはない。本丸は規模と「西御門」、「風口」、「ヒシ櫓」が書かれ、本丸の南側中央の台所御門は「詳名持房門」と表記されている。
- 二ノ丸は中堀西側に「授屋」、「左上馬入処」。中御門、東門は絵で表現される。また、中堀の東側は「時カネ」、「新蔵」。(煙硝)蔵には「不明」、作事所は絵で描かれる。三ノ丸は「大手」の名称とともに曲輪の規模が書かれている。
- ウ 景観年代：江戸時代中期と幕末の特徴を併せ持っており、嘉永7(安政1、1854)年頃の様子を伝えている。
- エ 作成年代：施設の名称の変遷と御給人の経歴から嘉永7(安政1、1854)年頃の作成とみて矛盾はない。

(9)「花巻城図(花巻御城廓図)」(第10図)

もりおか歴史文化館所蔵 3608(史35-3-024) 南部家旧蔵 189.0×157.0cm

ア 全体：南部家旧蔵の折図で美濃紙に似る黄色掛かった和紙に描かれている。花巻城の絵図の中では測量図のような精度を保つ。城と南側の中小路、南西方の上町、鍛冶町、川原町、新町、豊澤町、裏町、大工町や北西方の坂本町、一日市町、鍵町、四日町、吹張御組と四周の河川が描かれている。

イ 特徴：花巻城を中心として、東・西・南・北方面の様子が描かれている。構図は(11)「花巻城図」に近い。本丸は「御臺所前御門」、「西御門」が記され、三社は絵だけで表現されている。二ノ丸は中堀の西側は「中御門」、「御厩」、「御厩番」、「稽古場」、「馬場」が記され、冠木門、井戸は絵で表現される。中堀の東側は「御蔵前御門」、「東御門」、「焰硝御蔵」、「御囲穀御蔵」、「南御蔵」、「御作事所」が記され、土塀、鐘楼は絵だけで表現される。三ノ丸は西側の「追手御門」、「圓城寺御門」、「観音寺」と「館小路」や武士の居宅が詳細に書かれている。

ウ 景観年代：城内の各施設名や三ノ丸に居住する御給人である四戸音次郎が弟である泰次郎へ家督を継ぐ安政2(1855)年11月30日から神山彦右衛門が嫡子彦六に家督を継ぐ安政3(1856)年6月16日までである。

エ 作成年代：安政2(1855)年11月30日から安政3(1856)年6月16日までの7ヶ月間の様子を伝えている。なお、本図の年代観は安政元(1854)年頃とされてきた。

(10)「花巻城之図」(第11図)

岩手県立図書館所蔵 77011(22.3-16) 寄贈資料 191.0×161.0cm

ア 全体：盛岡藩士の家生まれ、歴史研究者であった太田孝太郎氏の旧蔵資料である。折図で厚手の美濃紙に描かれる。測量図のような精度を持つが、もりおか歴史文化館所蔵の(9)「花巻城図(花巻御城廓図)」とほぼ同じであることから写図か控図に想定される。城と南側の中小路、南西方の上町、鍛冶町、川原町、新町、豊澤町、裏町、大工町や北西方の、坂本町、一日市町、鍵町、四日町、吹張御組と四周の河川が描かれている。

イ 特徴：花巻城を中心として、東・西・南・北方面の様子が描かれており、図の精度は高い。構図は(9)「花巻城図」と同じである。年代は四戸泰次郎が音次郎から家督を継いだ安政2(1855)年11月30日から神山彦右衛門が彦六へ家督を継いだ安政3(1856)年6月16日の間。本丸は「御臺所前御門」、「西御門」が記され、三社は絵だけで表現されている。二ノ丸は中堀の西側は「中御門」、「御厩」、「御厩番」、「稽古場」、「馬場」が記され、冠木門、井戸は絵で表現される。中堀の東側は「御蔵前御門」、「東御門」、「焰硝御蔵」、「御囲穀御蔵」、「南御蔵」、「御作事所」が記され、土塀、鐘楼は絵だけで表現されている。三ノ丸は西側の「追手御門」、「圓城寺御門」、「観音寺」と館小路や武士の居宅が詳細に書かれる。

(9)の「花巻城図(花巻御城廓図)」と比較すると「追手御門」から「大手」。「圓城寺御門」から絵だけ。「観音寺」から「観音」の違いがある。なお、用紙は(9)に比べて大きい、その他の大きな違いはない。

ウ 景観年代：(9)「花巻城図」と同様に城内の各施設名や三ノ丸に居住する御給人である四戸音次郎と神山彦右衛門の家督年から安政2(1855)年11月30日から安政3(1856)年6月16日までの7ヶ月間に限定できる。

エ 作成年代：南部家所蔵の絵図の写、若しくは控と考えられるが、明治期以降に作成された可能性もある。なお、従来の年代観は安政元(1854)年頃とされている。

(11)「花巻城図」(第12図)

もりおか歴史文化館所蔵 03609(史35-3-023) 南部家旧蔵 55.6×53.4cm

ア 全体：盛岡藩に伝わった絵図で、城全体と周囲の城下、旧河川、南側の城下の一部が薄葉紙様の薄い紙に描かれた折図である。

イ 特徴：城の北側を流れていた北上川は貞享3(1686)年までに改修されて旧北上川の流路は瀬川として残る。本丸内は西門の位置に「天守臺」、「三社」の文字があり、台所門、菱櫓、石垣は絵で描かれる。二ノ丸は南北方向の中堀の西側には「石井伊賀守屋敷」、「稽古場」、「馬場」と表記され、中門、冠木門、馬屋は絵だけである。東側には「三新蔵」、「大豆蔵」、「財木蔵」、「開蔵」、「鐘堂」、「作事処」が記され、不明門、焰硝櫓は絵だけで描かれる。三ノ丸は街路「諸學四學位」、「十八ヶ崎 一名 鳥谷崎」、「観音寺」が記され、西と南側の門は絵で描かれている。

ウ 景観年代：構図、色調が「寛永盛岡城図」に似ており、「石井伊賀守屋敷」や「瀬川」の表記から江戸時代前期の特徴を持つが「天守臺」、「財木蔵」など特異な表記がある。花巻城に天守は存在せず、盛岡城では「三階櫓」から「天守」の呼称変更は天保13(1842)年。「石井伊賀守屋敷」とあるが、寛永2(1625)年に花巻城第五代郡代であった「石井善太夫光影」は500石取であるが官職名に疑問が残る²⁾。

エ 作成年代：盛岡藩での天保13(1842)年以降の天守の用法に加えて、「写」に用いる薄紙であることや「勢溜」などの語句から江戸時代後期以降に何等かの元図を根拠として兵法家が描いた絵図が、後に南部家に伝わった可能性も考えられる¹³⁾。

(12)「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻御城図)」(第13図)

花巻市博物館所蔵 16094 寄贈資料 78.3×55.1cm

ア 全体：掛軸として作成されている。使用焼や巻皺による傷みが著しい。本丸だけを描いた絵図で、上部に(11)「花巻城図」を写した「花巻御城図」と下部の「御本丸間取絵図」が一枚の本紙に描かれており、篆書体の表題がある。

イ 特徴：上部の「花巻御城図」は(11)「花巻城図」と全く同じ構図である。また、下部の「御本丸間取絵図」は「中ノ口御門」、「與力番」、「御武具蔵」、「三町所・御用所」、「御用ノ間」、「御金所」、「御代物所」、「御廣間(床)」、「小頭所」、「取次所」、「大(便所)」、「小(便所)」、「二畳台」、「御休息間」、「下足(風□□)」、「御末(床前)」、「くらがりの間」、「茶湯所」、「内談ノ間」、「御城代席」、「御茶湯所」、「物置」、「御物書所」、「御目□□」、「大納戸」、「御料理ノ間」、「西御門」、「天守臺」、「西□番所」、「三社堂」、「休息間 物置」、「御玄関」、「松ノ間(床所・御二畳臺)」、「菊ノ間(床所)」、「御家老席」、「桐ノ間(床・廊下・室)」、「菱御櫓」、「御臺所」、「常番所」、「下廊下」などが間取とともに記されている。

ウ 景観年代：上部の「花巻御城図」は(11)「花巻城図」と同じ図である。また、下部の「御本丸間取絵図」は江戸時代後期の絵図と比較すると「御臺所（前）御門」が「中ノ口御門」など施設名の大きな違いがある。建物の配置は、(2)「花巻城本丸図」と近似するが、土間が「小頭所」、「取次所」に代わっていることなど施設の名称や間取が異なっている。

エ 作成年代：元図が明らかではないが、ひらがなや片仮名を多用していることから、明治期以降に位置付けられる。

(13) 「花巻御城図—御本丸間取絵図（花巻御城図）」（第14図）

花巻市博物館所蔵 17775 寄贈資料 75.3×54.0cm

ア 全体：軸装となっており、使用焼や巻紙による傷みが著しい。上部に(11)「花巻城図」を写した「花巻御城図」。下部に「御本丸間取絵図」で篆書体の表題があり、(12)「花巻御城図—御本丸間取絵図（本丸間取絵図）」と同じ体裁となっている。

イ 特徴：上部の「花巻御城図」は「花巻御城図」や(12)と全く構図が同じであるが篆書の書体が異なっている。また「御本丸間取絵図」は(12)以降と同様に御台所御門が「中ノ口御門」に変わる。(12)との違いは篆書体の変化と「松ノ間（床所・御二畳臺）」が「松ノ間（床所・二畳台）」となることだけである。主な諸室は、「御廣間（床）」、「二畳台」、「御休息間」、「下足（風呂場）」、「御末（床前）」、「くらがりの間」、「茶湯所」、「料理ノ間」、「西御門」、「天守臺」、「西御番所」、「三社堂」、「休息間・物置」、「御玄関」、「松ノ間（床所・二畳台）」、「菊ノ間（床所）」、「御家老席」、「桐ノ間（床か廊下・室）」、「菱御櫓」などの文字の書体の違いがある。

ウ 景観年代：(12)「花巻御城図—御本丸間取絵図」とほぼ同じ体裁である。

エ 作成年代：「花巻御城図」の元図は(11)「花巻城図」であるが、「御本丸間取絵図」の元図が明らかではない。ひらがなや片仮名から明治期以降に位置付けられる。

(14) 「花巻御城間取絵図—花巻御城地取絵図（花巻御城本丸間絵図）」（第15図）

天巖山宗青寺所蔵 無番 104.0×54.0cm

ア 全体：掛軸である。(12)・(13)と同じ色調であるが、上部と下部の表題は縦書きではなく横書きの篆書体となり、本丸全体図と間取絵図の天地が逆転している。

イ 特徴：本丸：(13)との主な違いは、「御用ノ間」は「御用の間」、「内談ノ間」が「内談の間」、「松ノ間（床所・二畳台）」が「松の間（床所・御二畳臺）」、「菊ノ間（床所）」が「菊の間（床所）」である。また、「桐ノ間（床か廊下）」が一室となっているが、(3)「花巻城本丸御殿図」では「御次之間」となっている。さらに、「桐の間（御次間）」など(12)や(13)と同様ながら、ひらがなを多用している。

ウ 景観年代：(13)と比較すると、「御用ノ間」は「御用の間」、「内談ノ間」は「内談の間」、松ノ間など外周外縁の廊下は未表示から「廊下」、「松ノ間」の「二畳台」は「御二畳臺」、「松ノ間」・「菊ノ間」・「桐ノ間」はそれぞれ「松の間」・「菊の間」・「桐の間」に変わっており、総じて片仮名よりひらがなの多用が顕著である。

エ 作成年代：(12)と(13)に比べて、ひらがなが多用されていることから、明治期以降でも(12)・(13)に後続する年代に位置付けられる。

(15)「花巻城全図—御本丸間取絵図(花巻城下図)」(第16図)

岩手県立博物館収蔵 無番 78.1×52.6cm

- ア 全体：本丸部分だけの絵図で折図となっているが、本来は軸装と考えられる。全体の元図は(11)であるが誤記がある。傷みは少ない。上部に「花巻城全図」、下部は「御本丸間取絵図」が描かれ篆書体の縦書きで書かれた表題があるが、同じ縦書きで書かれた(12)と(13)とは篆書の書体が異なる。
- イ 特徴：(14)との違いは、「與力番」が「與力溜」、「御用の間」が「御用之間」、「下足 風呂場」が「下足 フロバ」、「くらがりの間」が「くらがり之間」、「内談の間」が「内談之間」、「御料理ノ間」が「御料理之間」、「西御門 天守臺」が「西御門 天守台」、「三社堂」が「三社」で、「廊下(内縁)」は表示がない。また、「松の間 床所・御二豊臺」が「松之間 床所・御二豊台」、「菊の間 床所」が「菊之間床所」、「桐の間」が「桐之間」。「廊下」、「御臺所」が「御台所」など「之」を使いながら当用漢字を含み、図も簡略化している。
- ウ 景観年代：絵図の中でも唯一、「番」を「溜」とし、また、ひらがなから漢字を多用する特徴があるが、基本的に(12)・(13)・(14)と図の構図を同じくすることからこれらに後続する時期に位置付けられる。
- エ 作成年代：(14)と比べて、「番」から「溜」のように文字が違い、「之」のように漢字が多く使われている。さらに「臺」から「台」など当用漢字を多用し、図を簡略化が図られていることから、(14)に後続する時期に位置付けられる。

(16)「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻城図)」(第17図)

十和田市郷土館所蔵 479 購入資料 197.0×67.2cm

- ア 全体：本丸だけの折図である。上に「花巻御城図」、下に「御本丸間取絵図」と縦書きの篆書による表題がある。稗貫郡役所、岩手軽便鉄道、高等女学校、岩手軽便鉄道が描かれている。
- イ 特徴：「花巻御城図」の元図は(11)の写しであるが、色調は(15)に似る。本丸は「與力溜」が「與力番」、「御武具櫓」が「御武具蔵」、「御用之間」が「御用ノ間」、「下足 フロバ」が「下足 風呂場」、「御末」が「御床」、「くらがり之間」が「くらがりの間」、「内談之間」が「内談ノ間」、「御料理之間」が「御料理ノ間」、「天守台」が「天守臺」。「三社」が「三社堂」、「休息門 物置」が「休息間 物置」となり、さらに未表示の廊下が「廊下」、「松之間 床所 御二豊台」が「松ノ間床所 御二豊臺」、「菊之間 床所」が「菊ノ間 床所」、「桐之間 廊下」が「桐ノ間 床か廊下」。床と間仕切なしの廊下が「廊下」、「御台所」が「御臺所」などのように助詞は「之」から(14)以前の「ノ」に戻されている。
- ウ 景観年代：(10)以降の本図以後は、台所前御門は中の口御門に変わる。(15)との違いは「之」から(14)以前の「ノ」に戻されているだけである。景観は江戸時代後期であるが、軽便鉄道が描かれている事から大正期以降である。
- エ 作成年代：岩手軽便鉄道は計画図。稗貫郡役所、岩手軽便鉄道、高等女学校、鉄道が計画図であることから大正2(1913)年以降の時期に位置付けられる。

(17) 「御本丸間取絵図」(第18図)

花巻市博物館所蔵 30199 寄贈資料 10.7×15.0cm

- ア 全体:絵図の上部には中小路の一部が残るものの本丸だけが写されている。「藤田屋写真館(はなまき太田)」の画題があり、額装になっている。
- イ 特長:本丸だけの写真資料。縦書きの篆書体による「御本丸間取絵図」の表題があり、図の上には「花巻城図」の一部である三ノ丸南側の中小路がある。(16)と本図との違いは、「三町所」が「三町筋」で「廊下」の表示はなし。「三社堂」は文字と鳥居の絵、「松ノ間」の「御二畳臺」が「御二畳台」に表記されるなど「所」が「町」の誤記や「ノ」が「の」、「臺」が「台」に変わっている。
- ウ 景観年代:大正期以降に位置付けられる。
- エ 作成年代:景観年代と同じく大正期以降に位置付けられる。

(18) 「花巻城本丸間取図」(第19図)

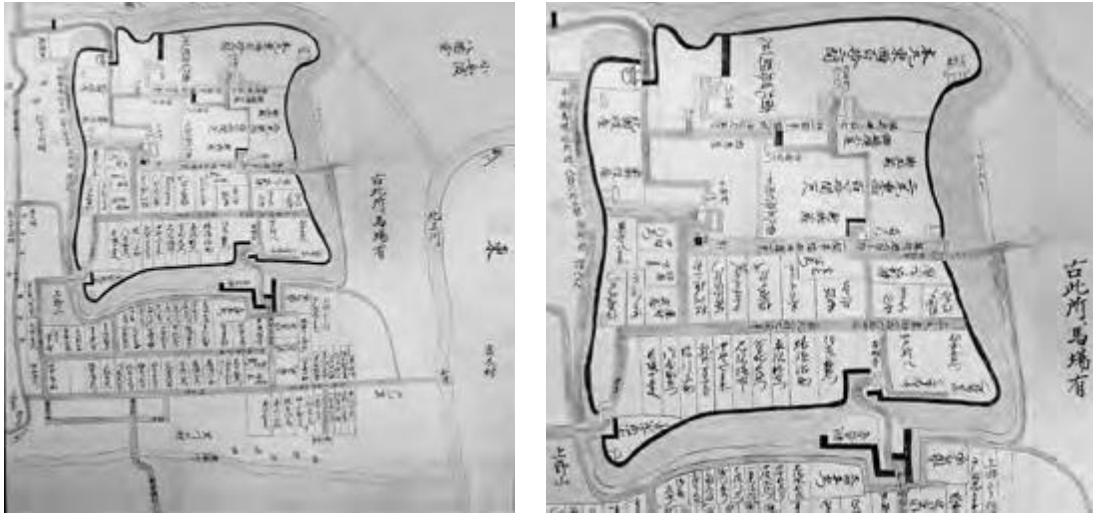
花巻市博物館所蔵 17924 寄贈資料 39.8×63.4cm

- ア 全体:用紙はボール紙様の厚紙に描かれた図で、現在は折図となっている。二ノ丸と三ノ丸は描かれていない。図の上部に(14)・(19)と同じく手書きの篆書体による右から横書きの「花巻城本丸間取図」の表題がある¹⁴⁾。
- イ 特長:(17)「御本丸間取絵図」と本図は、構図の上では変わりがなく、ともに「三町所」が「三町筋」の表記となる共通点がある。違いは「中ノ口御門」が「中の御門」、「御料理ノ間」が「御料理の間」、「松ノ間」・「菊ノ間」・「桐ノ間」はそれぞれ「松の間」・「菊の間」・「桐の間」、「御臺所」は「御台所」などカタカナからひらがなへの転換と多用がより図られている。
- ウ 景観年代:大正期以降に位置付ける。
- エ 作成年代:青焼図面の原図とも考えられる。青焼技術の実用化は大正9(1820)年以降とされていることから大正中期以降の作成とも想定される。

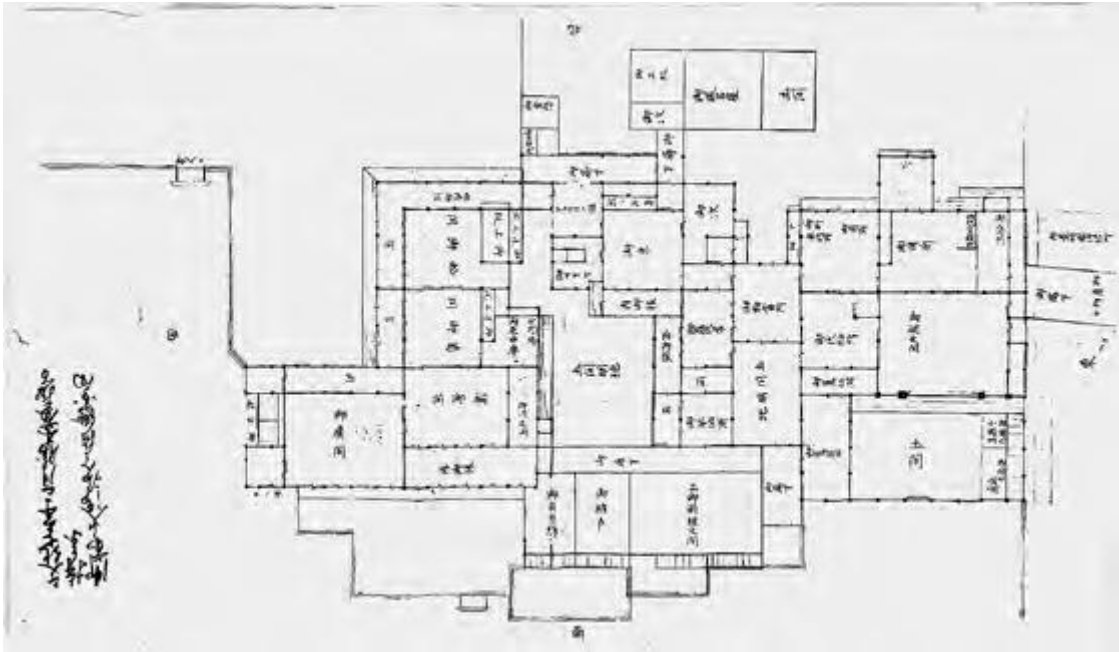
(19) 「花巻城御城地取絵図一間取絵図(花巻城御城地取絵図)」(第19図)

花巻市博物館所蔵 25236 寄贈資料 87.3×68.1cm

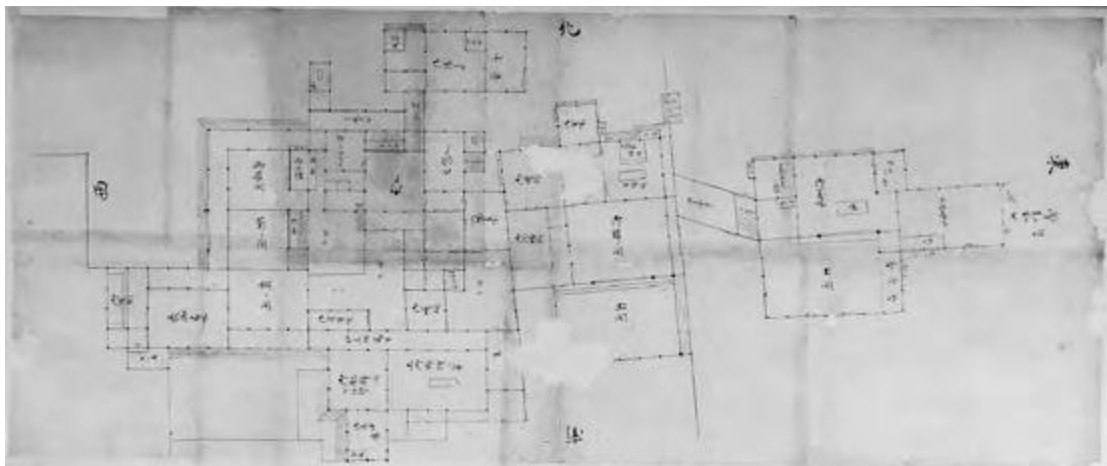
- ア 全体:ロールになっている。青写真そのものは天保13(1842)年以降に開発されたが、日本国内での青焼図面は大正9(1820)年にジアゾ式複写機として開発されたとされている。
- イ 特長:上部の「花巻城御城地取絵図」は間取図ではなく取絵図となっている。下部には「間取絵図」があり、縦書きの篆書体による表題がある。(17)や(18)と本図を比較すると構図の上では変わりがなく「くら可がりの間」に「可」が使われ、「三町所」が「三町筋」と書かれる共通点がある。(17)・(18)と(19)との違いは御殿北側中央の便所下の区画が連絡する廊下と間仕切りが(17)にはあるが、(18)・(19)にはなく、「御用の間」、「内談の間」。「御料理の間」、「御台所」などカタカナとひらがなの違いがある。
- ウ 景観年代:大正期以降に位置付けられる
- エ 作成年代:(17)・(18)との共通点から大正中期以降に位置付けられる。



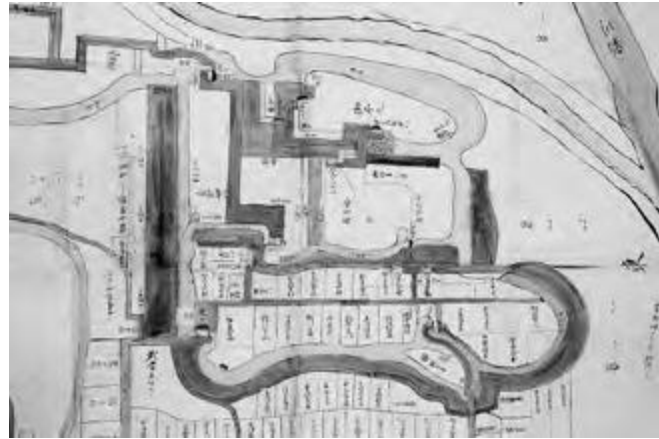
第2図 (1)「花巻城下図(花巻古図)」



第3図 (2)「花巻城本丸図」



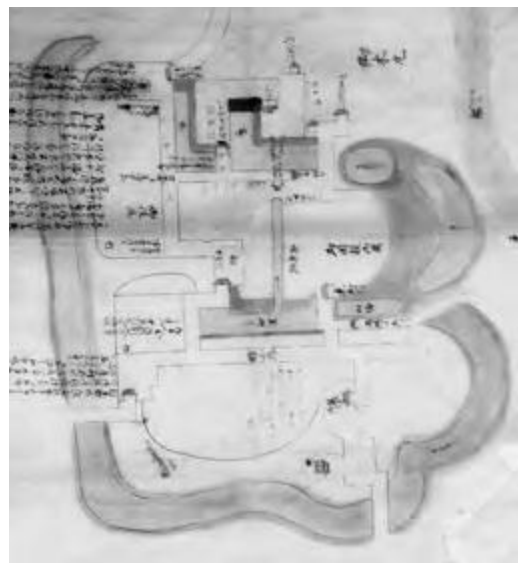
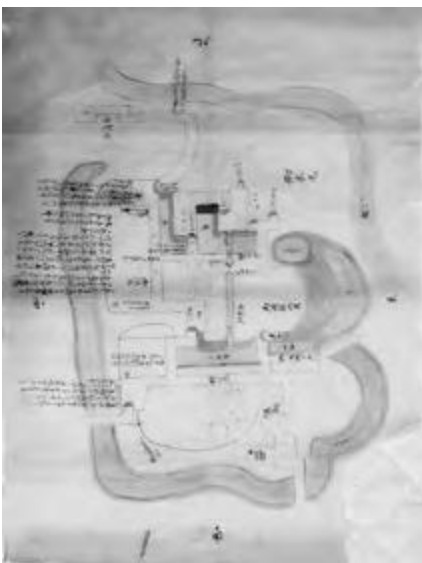
第4図 (3)「花巻城本丸御殿図」



第5図 (4)「花巻城下図」



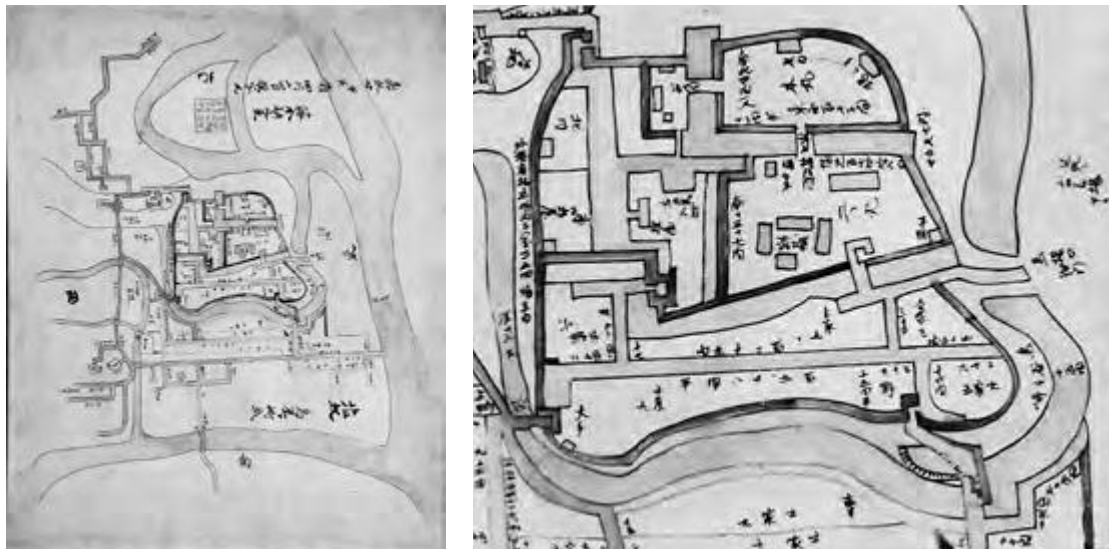
第6図 (5)「花巻城下図」



第7図 (6)「花巻城古城図」



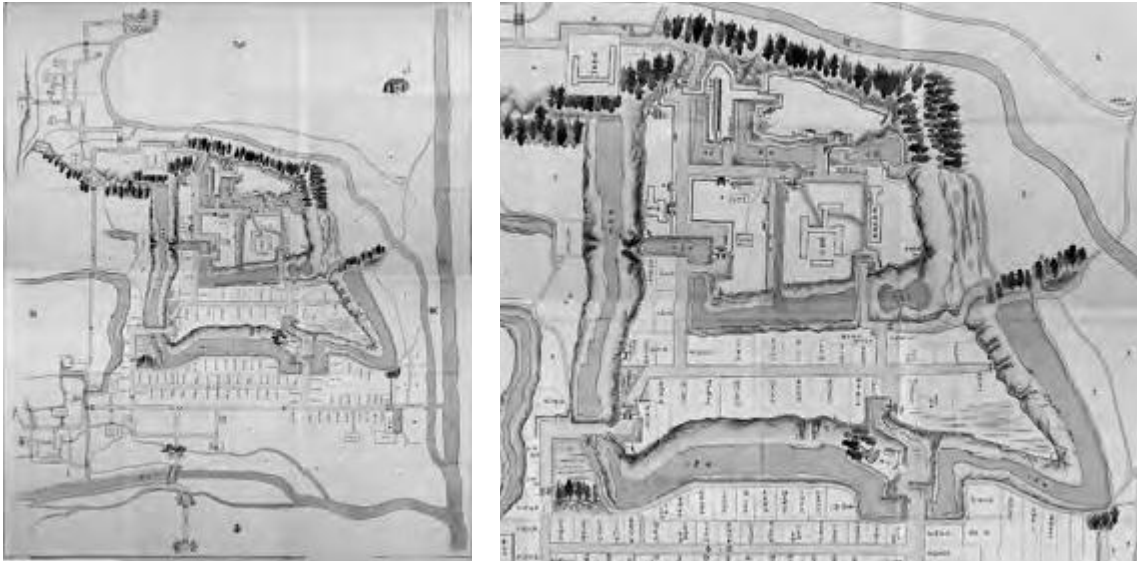
第8図 (7)「花巻之図」



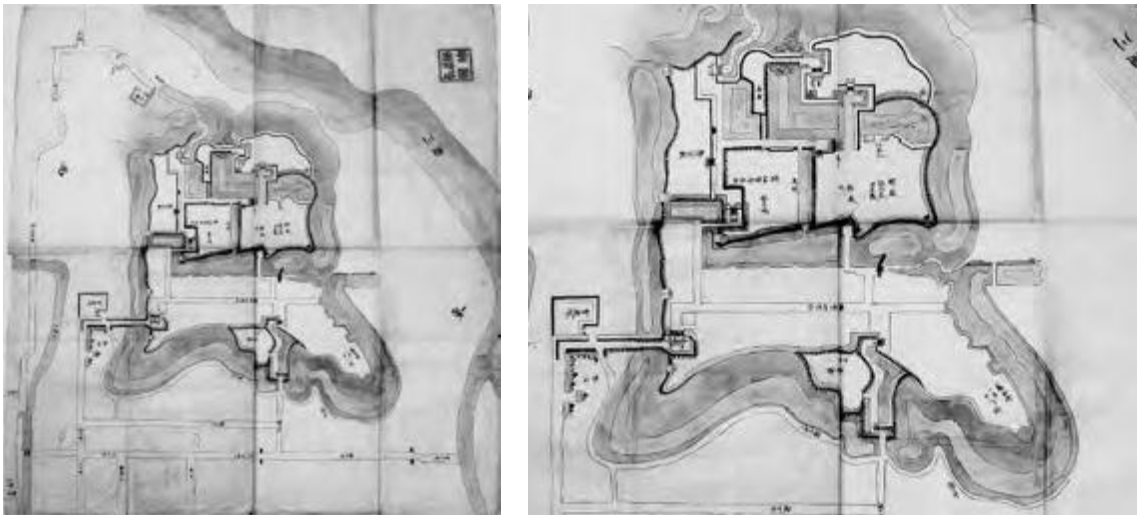
第9図 (8)「花牧 鳥屋ヶ崎城絵図」



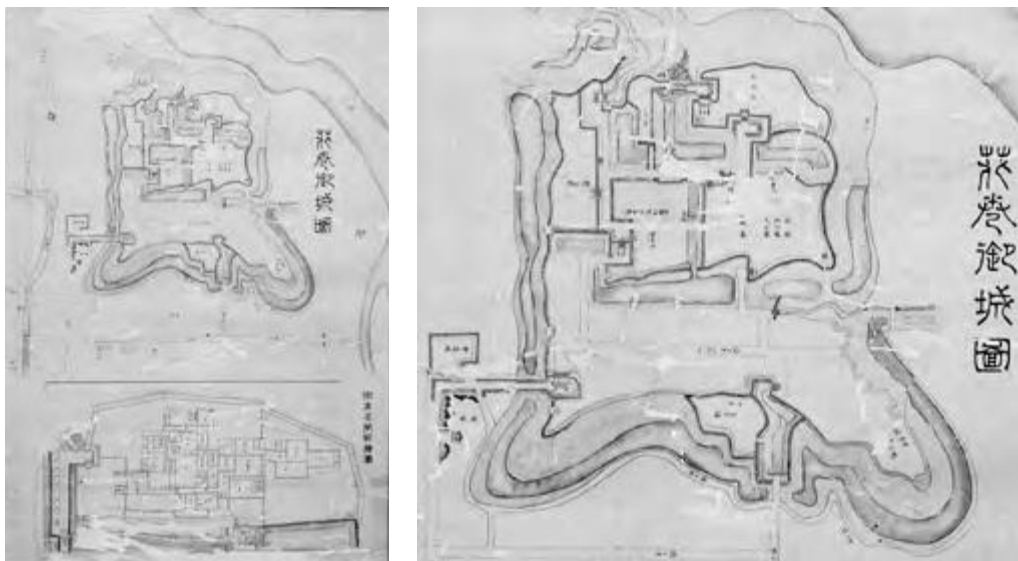
第10図 (9)「花巻城図(花巻御城廓図)」



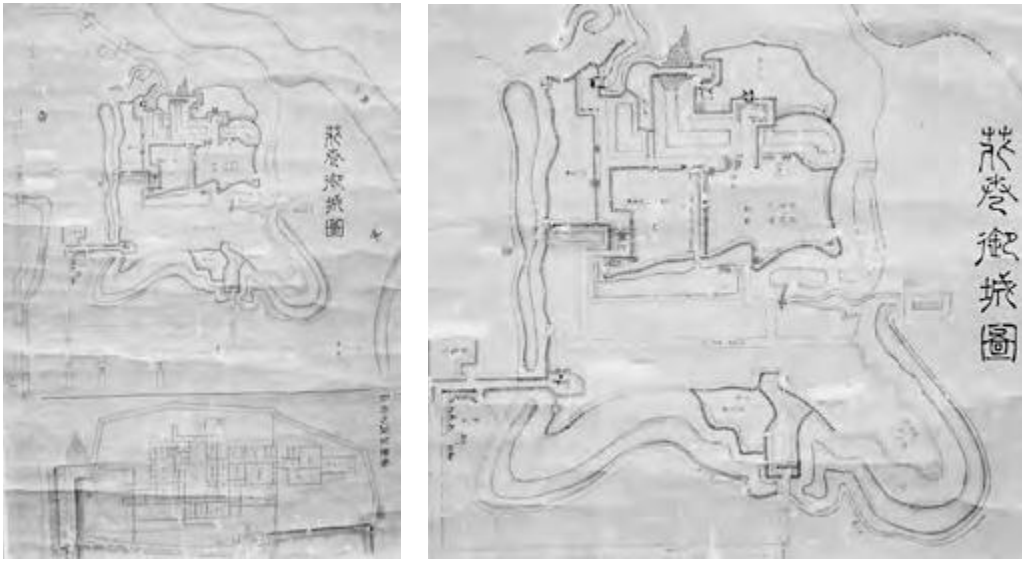
第11図 (10)「花巻城之図」



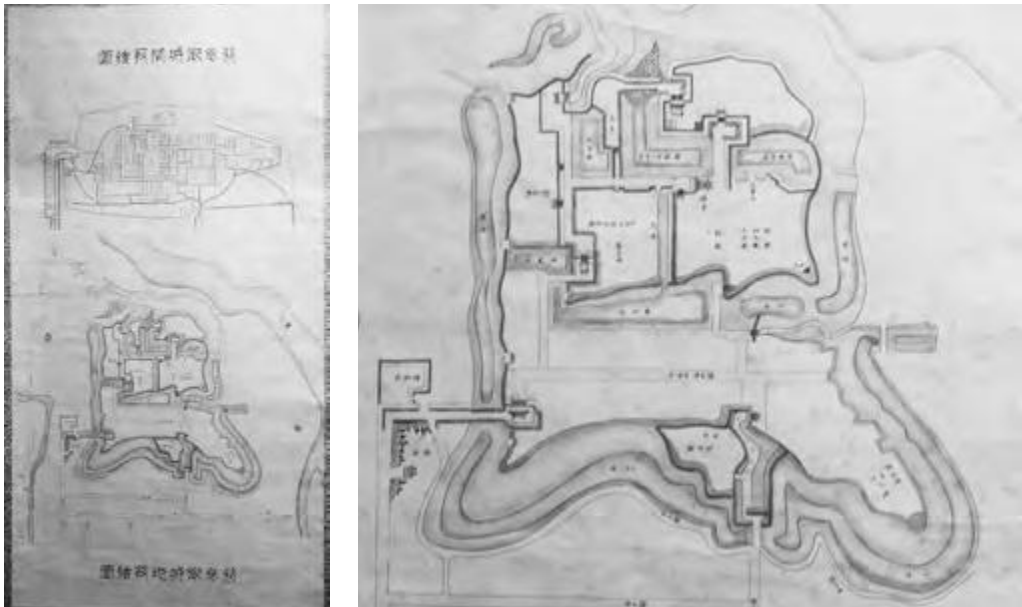
第12図 (11)「花巻城図」



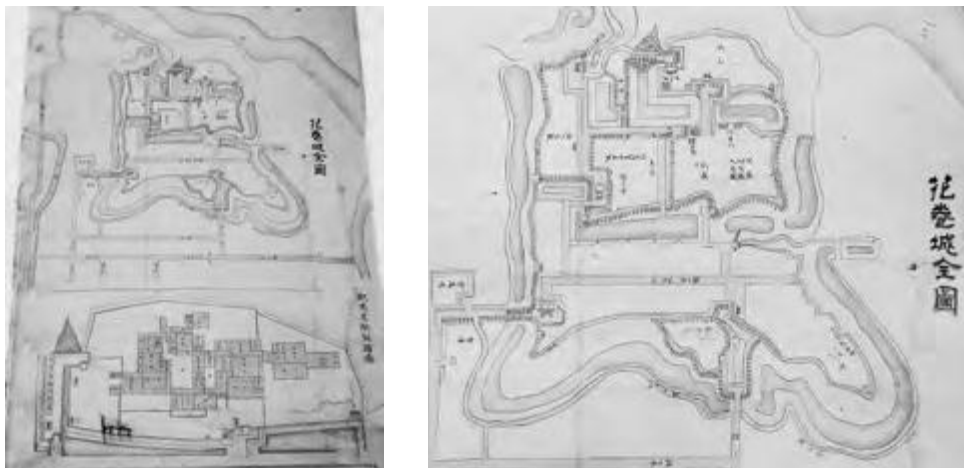
第13図 (12)「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻御城図)」



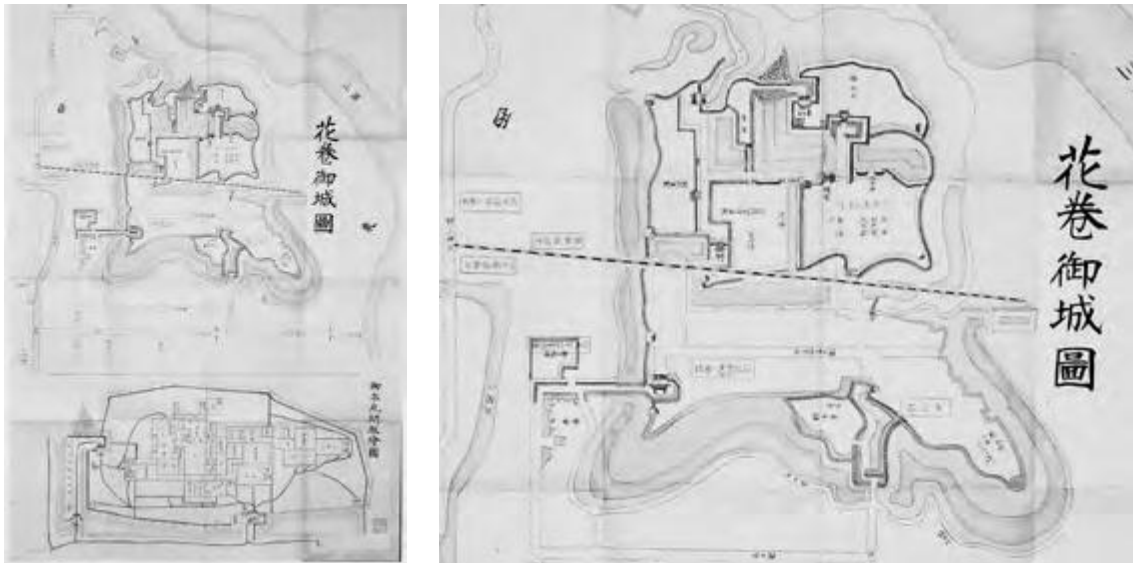
第14図 (13) 「花巻御城圖—御本丸間取絵図(花巻御城圖)」



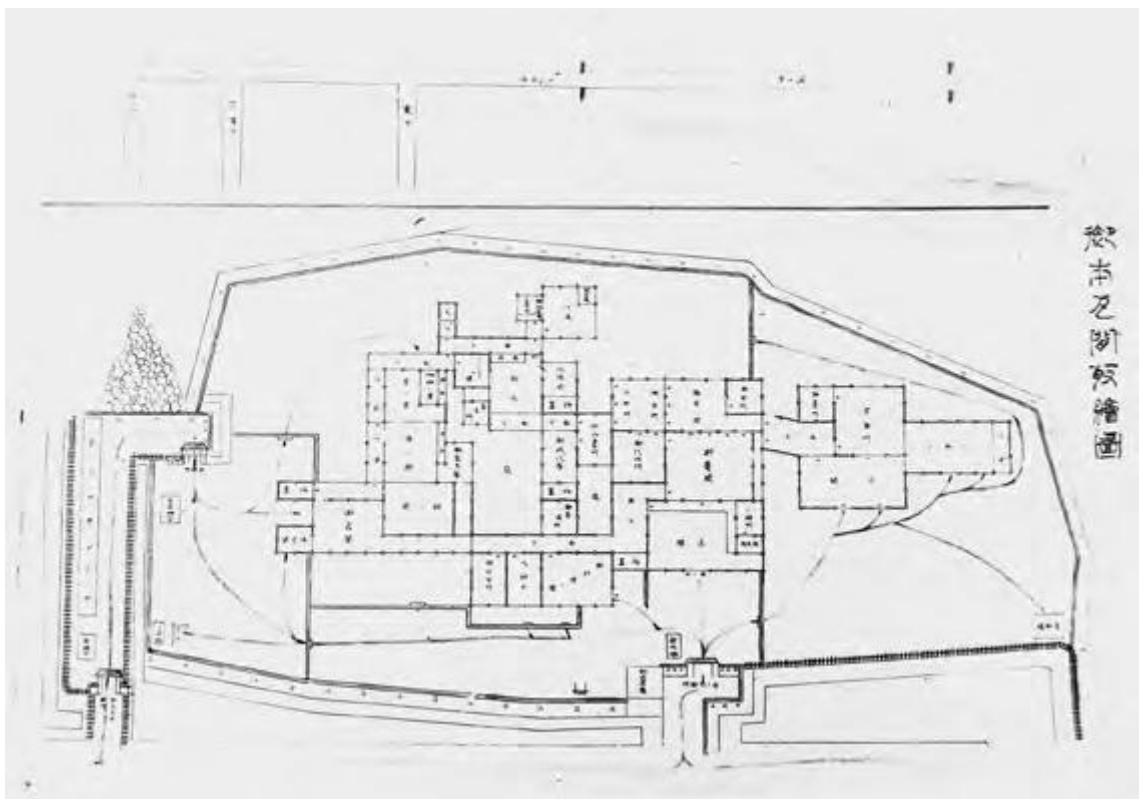
第15図 (14) 「花巻御城間取絵図—花巻御城地取絵図(花巻御城本丸間絵図)」



第16図 (15) 「花巻城全圖—御本丸間取絵図(花巻城下圖)」



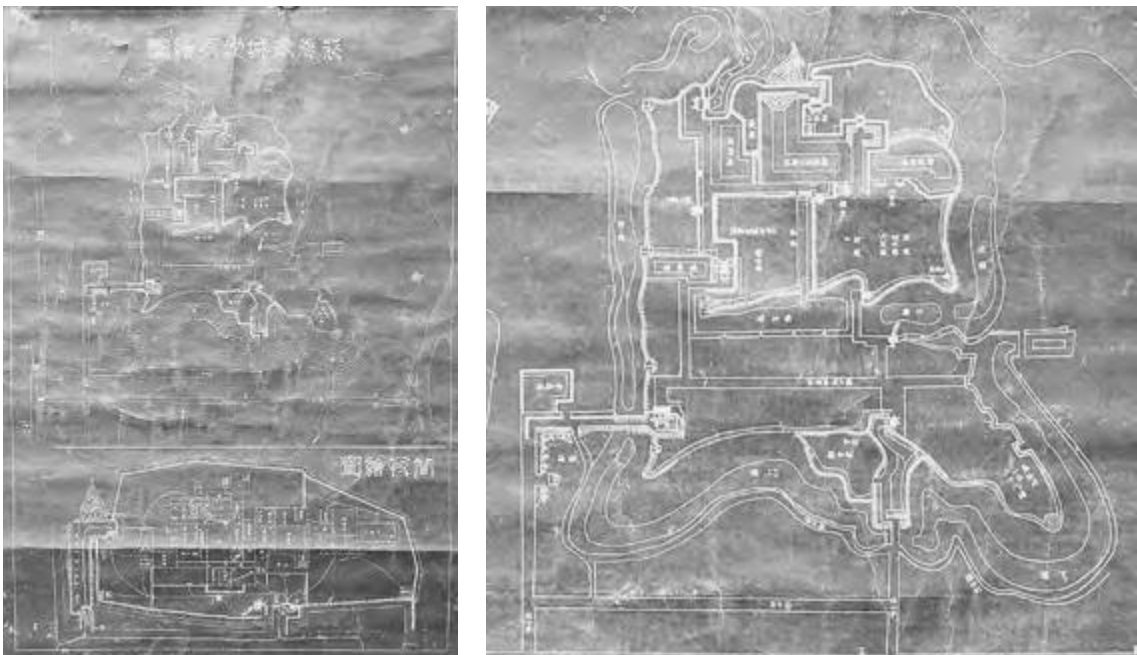
第17図 (16) 「花巻御城圖—御本丸間取絵圖 (花巻城圖)」



第18図 (17) 「御本丸間取繪圖」



第19図 (18)「花巻城本丸間取図」



第20図 (19)「花巻城御城地取絵図—間取絵図(花巻城御城地取絵図)」

2 絵図の特徴と相違

(1)三ノ丸居住の御給人(表1)

三ノ丸には50石以下から100石前後の禄高の御給人が居住しており、南北方向の館小路の街路を挟んで33ヶ所の居住区がある。以下に三ノ丸に居住した御給人の氏名が書かれている以下の5点の絵図について検討した。なお、表1の御給人のうち、網目となっている御給人については経歴を明らかにすることができなかったが、経歴を辿ることができた人物によって絵図の年代を把握した。

ア(1)「花巻城下図(花巻古図)」花巻市博物館所蔵

三ノ丸居住の御給人の氏名からみると、伊藤所左衛門は元禄12(1699)年8月10日に庄左衛門へ名を改め、さらに正徳5(1715)年5月15日に久蔵へ名を改めていることが判る¹⁵⁾。また、時代の下限を知る手掛かりは長沼九一郎で、享保2(1717)年5月13日条に「一名改被 仰出 花巻御給人 九一郎事長沼治五右衛門」とあり、長沼九一郎から五右衛門に名を改めている¹⁶⁾。ただし、金屋甚十郎だけの経歴はやや時代が下るが字名に因る可能性もあるが、いずれ江戸時代中期の様子を描いた絵図である。

イ(4)「花巻城下図」もりおか歴史文化館所蔵

絵図の表題は「花巻城下図 文政五」である。本絵図の年代の上限は、御給人のうち、神山繁太の系譜に関する記事で、盛岡藩の「諸士給人由緒帳(花巻御給人)」の神山家の事項に「一 神山繁太 親幸右衛門儀老衰仕御奉公可相勤躰無之二付、倅繁太家督被仰付被下度旨申上、願之通無相違 文政三年十月被仰出」とあり、同年月に親幸右衛門から倅繁太に家督が継がれている¹⁷⁾。また下限は絵図の表題にある文政5(1822)年とすると、この間の約2年間に集約される。

ウ(7)「花巻之図」花巻市博物館収蔵

絵図の註釈文に「嘉永三庚申戊歳 十月吉辰 上山圭廣淵 写之」とある。絵図の年代の上限は、盛岡藩家老席日記「覚書」嘉永3(1850)年6月24日条に「一百式拾三石四斗余 内八石六斗式升壺合野竿高 花巻御給人 伊藤大八養父、伴右衛門存生之内願之通、名跡無相違被下置(以下略)」とあり、伊藤大八が養父伴右衛門から同月日に名跡を継いでいる¹⁸⁾。また時代の下限は、註釈文の年月から嘉永3(1850)年9月頃までの約3ヶ月間の作成年代が与えられる。

エ(9)「花巻城図(花巻御城城郭図)」もりおか歴史文化館所蔵

絵図の年代の上限は、盛岡藩家老席日記「覚書」安政2(1855)年11月30日条「一 三拾式石五斗四升九合 花巻御給人 四戸泰五郎 兄、音次郎存生之内願之通、名跡無相違被下置、(以下略)」にみえるように同月日に四戸音次郎から弟泰次郎へ家督を譲っている¹⁹⁾。下限は安政3(1856)年6月16日条「一花巻御給人 神山彦右衛門 同 彦六 彦右衛門儀老衰二付、御奉公相務、依頼隠居被仰付、嫡子彦六江家督無相違被下置(以下略)」とあるように神山彦右衛門が嫡子彦六へ家督を譲る同月日までである²⁰⁾。このことから絵図の景観年代や作成年代はこの約7ヶ月間に限定ができる。

表1 花巻城三ノ丸居住の御給人

分類	日附	通稱	氏名	官階	備考
区分	(1)	(4)	(7)	(9)	(10)
資料	「花巻城下図」 花巻の御所跡 1331年	「花巻城下図」 花巻の御所跡 1331年	「花巻城下図」 花巻の御所跡 1331年	「花巻城下図」 花巻の御所跡 1331年	「花巻城下図」 花巻の御所跡 1331年
時代	江戸時代中期 享和5(1795)、5.15、久保へ名改から享和2(1797)年5.15名改まで	江戸時代前期 文政3(1822)年 文政3(1820)年10月式一越宮儀の 文政5(1822)年頃まで	江戸時代前期 享和3(1800)年10月 上山御所 享和3(1800)年6.24御式一越宮儀の 享和3(1800)年8月頃まで	江戸時代前期(享和) 安政2(1855)年11.20家督～安政3(1856)6.16家督まで	江戸時代前期(享和) 安政2(1855)年11.20家督～安政3(1856)6.16家督まで
期間	約2年間	約2年間	約2年間	約2年間	約2年間
1	伊藤庄左衛門	神山久藏	—	西戸重太郎 江 新保屋屋	西戸重太郎 江 新保屋屋
2	西戸源次	西戸源次	西戸源次郎	西戸源次郎	西戸源次郎
3	鹿打(内)次郎(喜)	鹿打喜七	—	鹿打喜七	鹿打喜七
4	伊藤一助兵衛	神山北五郎	—(明地)	金田一源五郎	金田一源五郎
5	中村右衛門	堀内左衛門	堀内左衛門	堀内左衛門	堀内左衛門
6	奥寺八兵衛	中村喜作	佐藤文右衛門 明地	喜作	喜作
7	北川源三郎	神山又六	早瀬右衛門	早瀬右衛門	早瀬右衛門
8	高井庄左衛門	伊藤信治	伊藤大八	伊藤大八	伊藤大八
9	戸東文太夫	佐藤権四郎	北藤謙兵 明地	三田善九郎	三田善九郎
10	佐藤十左衛門	神山繁太郎	—(明地)	西戸源次	西戸源次
11	新保兵衛	土藤文治	神山庄右衛門 明地	神山直八	神山直八
12	—	戸田本藏	戸田本藏	戸田本藏	戸田本藏
13	長瀬九一(物)屋	土田直作	土田直藏	土田直藏	土田直藏
14	中川右衛門	—	戸田本藏 明地	戸田本藏 江 新保屋屋	戸田本藏 江 新保屋屋
15	太田平兵衛	越後繁盛	中村元江	神山庄右衛門	神山庄右衛門
16	新保戸左衛門	明地	—(明地)	高瀬源平	高瀬源平
17	新保戸左衛門	—	—(明地)	小野寺門右衛門	小野寺門右衛門
18	大平	源平	源平	源平	源平
19	小山源次郎	—	—	—	—
20	—	伊藤兵衛	伊藤小八郎	伊藤小八郎	伊藤小八郎
21	高井十五太夫	—	高井庄左衛門	高井庄左衛門	高井庄左衛門
22	門屋右衛門	藤引左衛門	藤引左衛門	藤引左衛門	藤引左衛門
23	藤引左衛門	高瀬小十郎	西戸源次郎	西戸源次郎	西戸源次郎
24	北川源三郎	北川三郎	北川源次郎	北川源次郎	北川源次郎
25	中野七兵衛	明地	西戸 明地	—	—
26	石井源三郎	北川源三郎	神山直八	北川源三郎	北川源三郎
27	高井庄左衛門	平瀬庄左衛門	平瀬庄左衛門	平瀬庄左衛門	平瀬庄左衛門
28	(出典不詳)一徳兵衛	藤引左衛門	藤引庄右衛門	藤引庄右衛門	藤引庄右衛門
29	伊藤庄左衛門	藤引左衛門	藤引庄右衛門	藤引庄右衛門	藤引庄右衛門
30	—	門屋三郎 門屋庄左衛門	門屋庄左衛門	門屋庄左衛門	門屋庄左衛門
31	藤引寺	藤引寺	藤引寺	藤引寺	藤引寺
32	西戸源八	高瀬守太 多田一(兼)北	門屋庄左衛門	門屋庄左衛門	門屋庄左衛門
33	北川庄右衛門	北川源八	金田一源六	北川源次	北川源次
34	高井十郎	中野源三郎	中野源三郎	中野源三郎	中野源三郎
35	西戸庄左衛門	中野源三郎	—	—	—
36	—	—	高井十郎	—	—
37	藤引寺	藤引寺	藤引寺	藤引寺	藤引寺

※ 太字は時期が異なる。横線の氏名は高瀬が未確認の御給人。 — 任職在官なし(明地)

オ (11)「花巻城図」岩手県立図書館所蔵

(10)「花巻城之図」とまったく同じ構図で、かつ御給人の氏名であることから絵図の景観年代の上限と下限も同じ年代が与えられる。作成年代は写か控と考えられることから安政3(1856)年以降とするが、明治期以降の可能性もある。以上のようにア～オの絵図の景観年代はある程度限定できる。

(2) 絵図の時期

花巻城に関する絵図19点の景観年代及び作成年代の概略を以下に整理する²¹⁾。

ア I期(江戸時代中期)

花巻城に関する絵図の中で最も古い絵図で、三ノ丸居住の御給人の経歴のほか「矢倉」や「破損小屋」などの記述は江戸時代中期の特色を有している²²⁾。

(1)「花巻城下図」正徳5(1715)年5月15日から享保2(1717)年5月13日

イ II期(江戸時代後期)

文化7(1810)年から嘉永3(1850)年頃に至る6点の絵図がある。(5)の絵図は文政9(1826)年頃の様相を呈するが、註釈文は昭和期の戦後の特色がある。

(2)「花巻城本丸図」文化7(1810)年3月

(3)「花巻城本丸御殿図」文化7(1810)年から文化13(1816)年3月頃

(4)「花巻城下図」文政3(1820)年10月から文政5(1822)年頃まで

(5)「花巻城下図」文政9(1826)年以降

(6)「花巻城古城図」天保14(1843)年又は安政2(1855)年以降

(7)「花巻之図」嘉永3(1850)年6月24日から嘉永3(1850)年9月頃まで

ウ III期(江戸時代末期)

嘉永4(1853)年以降、所謂幕末の絵図として4点がある。このうち(11)は寛永期の特徴があるが、課題が残ることから作成年代はさらに下る可能性がある。

(8)「花牧 鳥屋ヶ崎城絵図」嘉永7(安政1、1854)年頃

(9)「花巻城図」安政2(1855)年11月30日から安政3(1856)年6月16日

(10)「花巻城之図」安政2(1855)年11月30日から安政3(1856)年6月16日

(11)「花巻城図」天保13(1842)年以降

エ IV期(明治期・大正期)

IV期の5点の絵図はすべて篆書体の表題となる。絵図の体裁やひらがなやカナ文字、漢字の用法からみると(12)・(13)・(14)と(15)・(16)とは区分できる。諸室の名称の表記のあり方はそれぞれ異なっており同じ資料はない。

(12)「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻御城図)」明治期以降

(13)「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻御城図)」明治期以降

(14)「花巻御城間取絵図—花巻御城地取絵図(花巻御城本丸間絵図)」明治末期

(15)「花巻城全図—御本丸間取絵図(花巻城下図)」明治期末から大正期

(16)「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻城図)」大正初期

オ 第V期(昭和期以降)

V期の絵図は、写真・ボール紙への印刷や青焼の資料である。IV期までの絵

図と比較して、さらに、ひらがなが多用され、それまでの「三町所」→「三町筋」、「御臺所」→「御台所」、「くらがりの間」→「くら可りの間」、「御廣間」に床の間が設けられているなど、Ⅳ期と明らかに異なる表記の一群で、ひらがなの使用頻度によって序列した。なお、昭和21(1946)年に告示された新当用漢字の変更を含むことから、作成時期はさらに下る可能性がある。

(17)「御本丸間取絵図」大正期以降

(18)「花巻城本丸間取図」大正期以降

(19)「花巻城御城地取絵図—間取絵図(花巻城御城地取絵図)」大正9年以降

(3) 施設と諸室の変遷

ア 本丸

本丸の主要な施設の変遷をみると、(1)「御臺所御門」→(2)「御入口」→特異な(8)を除いて、(4)から(9)は「御臺所前御門」となり「前」が付くようになる。近代から現代にかけて作成されたと想定される(12)から以降はいずれも「中ノ(の)口御門」である。また、西御門は(2)が「西入口」で、(1)・(4)から(10)・(17)・(18)は「西御門」で、(11)だけが「天守臺」。城図と御殿図が描かれる(12)から(16)・(18)は「西御門」と「天守臺(台)」となる。さらに南西部の三社は「三社堂」や「三社」と記される。さらに櫓は(1)「菱矢倉」、(7)「菱御矢倉」、(8)「ヒシ櫓」であるが、(4)と(12)以降は「菱御櫓」である。

なお、本丸御殿建物の変遷については、発掘調査によって確認され、中村氏により平面形は、(12)から(19)→(2)→(3)への変遷が整理されている⁹⁾・¹¹⁾。(2)から(3)への平面形の移り変わりは、1 花巻城に関する絵図(3)で述べたとおり、建物東側の蔵や台所施設が描かれて建物南側に「老中席」が新たに設けられる。さらには諸室の名称や間取に変化があることである。(2)の作成時期は、文化7(1810)年3月。(3)は時期について中村氏は湯殿便所の新設記事を以て文化13(1816)年3月以降としている¹¹⁾。なお、兼平氏から御殿の改修などの要因として文化5(1808)年9月21日条「一 花巻御城地之儀は、境目樞要之場所に候之間、勤向重キ事ニ候、(以下略)」があるとの御教示を頂いた²³⁾。

なお、ここで課題となるのは、(12)から(19)までの絵図の位置付けである。この絵図は掛軸のほか写真、青焼などの用途に作成された絵図で所謂、清絵図のような「史料」ではなく、二次「資料」である。城跡全体図は明らかな来歴が不明な(11)の写であるが、御殿全体図についても諸室の名称がそれぞれ異なっており、元図が明確ではない現時点では、年代的位置付には留意を要する。

イ 二ノ丸

主要な施設の名称は、(10)までの絵図に表記されており、「中御門」と「御蔵前御門」は各期を通じて踏襲されているが、「不明御門」は文政9(1826)年7月26日に「東御門」に名称を変える⁶⁾。また(1)の「御土蔵」から「御囲殻蔵」へは(4)以降。(1)の「新御蔵」から「南御蔵」への変更は(9)の時期以降であるが、(6)にもあることから年代は安政2(1855)年以降となる可能性がある。

ウ 三ノ丸

西側の門の名称は(10)までの絵図に表記されており、(1)・(8)・(10)が「大手」、(4)・(6)・(7)・(9)は「追手」や「追手御門」である。

また、円城門は「圓城寺」・「圓城御門」。観音寺は「観音寺」・「観音堂」・「観音」と変遷する。

5 まとめにかえて

本稿は花巻城の構造を知ることができる19点の資料について、各々の特徴から景観年代と作成年代を検討するとともに、本丸の御殿建物から三ノ丸にかけての施設の名称の変遷を比較した。

分析した絵図は、盛岡藩が作成した(9)「花巻城図(花巻城郭図)」のような「清絵図」、のほかに、その「写図」又は「控図」と考えられる(10)「花巻城之図」や執務上から作成した(2)「花巻城本丸図」・(3)「花巻城本丸御殿図」・(6)「花巻城古城図」があり、ほかに花巻城の城(郡)代が関わった(1)・(4)の図。さらには兵法家が描いたと考えられる(7)「花巻之図」・(8)「花牧 鳥屋ヶ崎城絵図」・(11)「花巻城図」、いわゆる「史料」がある。

さらには、(12)「花巻御城図一御本丸間取絵図(花巻御城図)」以降の近代以降と考えられる絵図が存在するが、本稿では紙幅の都合もあって詳しい説明を欠いたことから今後の課題とする。

なお、脱稿後に花巻市博物館において、(8)「花牧 鳥屋ヶ崎城絵図」とは色彩や大きさは異なるものの、同じ資料名称で、かつ図の描き方を同じくする「花牧 鳥屋ヶ崎城絵図」を確認した(Ⅲ期)²⁴⁾。絵図の左下には額装に仕立てる際に文字が半裁されているため判読が困難であるものの「□□□□寫之」とあり、(8)の本丸では「詳名 持房門」が「御台所御門」、二ノ丸は「差上馬入処」が「献上馬入処」となり、「大工小屋」が明示されている。なお、「御台所御門」は第Ⅰ期に特徴的な名称である。2点の絵図は文字の筆致を同じくすることから、謙信流軍学者である藤本融之丞の作成の可能性が高い。

さらに、昭和12(1937)年に印刷された「花巻城略図」(Ⅴ期)も確認した²⁵⁾。この図の本丸から三ノ丸の縄張と江戸時代の主な施設の名称が黒文字で書かれるとともに、本丸には花巻小学校花壇。馬出には花巻小学校。二ノ丸の全域は鳥谷ヶ崎グラウンド(現在の花巻小学校校庭・ポランの広場)、佐藤昌氏宅、四角山、畑。三ノ丸には館小路、花城小学校、東公園、鳥谷ヶ崎神社、宅地、岩手県蚕業取締所がある。二ノ丸と三ノ丸の間の薬研堀・白堀には東西方向の岩手軽便鉄道の路線が主文字で書かれており、「朱線は昭和二十四年四月現在」とある。

以上の2点の図面を加えた花巻城に関する図面の総点数は21点を数える。

最後になりましたが、本稿の執筆にあたり東北学院大学教授 兼平賢治氏、日本城郭史学会盛岡支部長 神山仁氏、もりおか歴史文化館、花巻市総合文化財センター、資料を所蔵・収蔵されている個人・寺院・機関より御指導と御協力を頂きましたことを、心より感謝申し上げます。

○註

- 1) 所蔵は館または個人が寄贈・購入によって所有権を有する資料については所蔵とし、寄託・預かり資料については収蔵と記した。
- 2) 城代の呼称は、『花巻市史 第二巻』によれば、天正19年から慶應4(明治1)年まで花巻城が機能した278年間において、31名の城代、77名の郡代の計108名が任命されており、各期の政情によって呼称は変わる。花巻市教育委員会(1981)「第四節 江戸時代の変遷」『花巻市史 第二巻』(株図書刊行会、及び「系胤譜考」「参考諸家系図」参照
- 3) 盛岡藩家老席日記「雑書」正徳元年12月29日条に「花巻御城内八幡宮、弁財天、稲荷三社へ(攻略)」とある。
- 4) 施設の名称は絵図が描かれた時期によって異なる。ここではもりおか歴史文化館所蔵の「花巻城図(花巻御城郭図)」の施設名を用いた。なお、筆者は本絵図の作成は、安政2年から安政3年の作成年代を与えている。
- 5) 小原茂(1996)「花巻城下居住の武士について」『岩手の古文書第10号』平成8年3月31日 岩手古文書学会
- 6) 小原茂(2002)「花巻城代日誌概略年表 解題」『花巻史談 第二十七号』平成14年3月31日 花巻市談会
- 7) 小原茂(2008)「参勤交代と花巻」『花巻市博物館研究紀要第4号』平成20年3月28日 花巻市博物館
- 8) 村田淳・中村隼人・高橋静歩(2018)「花巻城の研究—三之丸における遺構・遺物の検討—」『花巻市博物館研究紀要第14号』平成31年3月31日 花巻市博物館
- 9) 村田淳(2019)「花巻城出土の陶磁器類—花巻城期における出土傾向の分析」『花巻市博物館研究紀要第15号』令和2年3月31日 花巻市博物館
- 10) 中村隼人(2019)「花巻城本丸御殿の建築空間(1)」『花巻市博物館研究紀要第15号』令和2年3月31日 花巻市博物館
- 11) 村田淳(2020)「花巻城出土の陶磁器類(2)—花巻城改修以前における出土傾向の分析」『花巻市博物館研究紀要 第16号』令和3年3月31日 花巻市博物館
- 12) 中村隼人(2020)「花巻城本丸御殿の建築空間(2)」『花巻市博物館研究紀要第16号』令和3年3月31日 花巻市博物館
- 13) 神山仁氏から「天守臺」、「石井伊賀守屋敷」の表現に加えて武者溜を意味する「勢溜」や三ノ丸東端の土塁の形状、さらには用紙が「写」に用いられる薄紙であることなどから、兵法家による作成の可能性も含めて慎重な取扱いが必要であるとの指導をいただいた。
- 14) 日本語の右からの横書きは、翻訳文書の普及によって昭和24(1949)年頃から猶予期間を設けながら左からの横書きが始まり、昭和27年「公用文の作成要領」の通達により右からの横書きは原則なくなったとされる。
- 15) 盛岡市教育委員会 盛岡藩家老席日記『雑書 第10巻』(1996)正徳5年5月15日条 平成8年12月25日 (株熊谷印刷)
- 16) 盛岡市教育委員会 盛岡藩家老席日記『雑書 第11巻』(1997)享保2年5月13日条 平成9年12月25日 (株熊谷印刷)
- 17) もりおか歴史文化館所蔵「諸士給人由緒帳」花巻御給人神山家の文政3年10月
- 18) 盛岡市教育委員会 盛岡藩家老席日記『覚書 第6巻』(2025)嘉永3年6月24日条 令和7年3月30日 (株東洋書院)
- 19) 盛岡藩家老席日記「覚書」安政2年11月30日条(句点と空白は筆者) もりおか歴史文化館所蔵
- 20) 盛岡藩家老席日記「覚書」安政3年6月16日条(句点と空白は筆者) もりおか歴史文化館所蔵
- 21) 江戸時代の区分として、江戸時代前期は慶長8年以降。江戸時代中期は正徳元年以降。江戸時代後期は天明7年以降。江戸時代末期は嘉永4年以降の概念で区分している。
- 22) 盛岡藩家老席日記「雑書」享保2年12月24日条「一 花巻御城二之丸之内破損小屋焼失仕候得共、早速火鎮候段、(以下略)」
- 23) 兼平賢治氏の御教示による。盛岡市教育委員会 盛岡藩家老席日記『雑書 第40巻』(2016) 文政5年9月21日条 平成28年11月1日 (株東洋書院)
- 24) 「花巻 鳥屋ヶ崎城絵図」花巻市博物館所蔵 00277
- 25) 「花巻城略図」花巻市博物館所蔵 17277

○挿図

- 第1図 花巻城跡全体図
- 第2図 (1) 「花巻城下図(花巻古図)」花巻市博物館所蔵 13316
- 第3図 (2) 「花巻城本丸図」花巻市博物館収蔵 28011

- 第4図 (3) 「花巻城本丸御殿図」花巻市博物館収蔵 00072
- 第5図 (4) 「花巻城下図」もりおか歴史文化館所蔵 03629
- 第6図 (5) 「花巻城下図」個人所蔵 無番
- 第7図 (6) 「花巻城古城図」花巻市博物館所蔵 36638
- 第8図 (7) 「花巻之図」花巻市博物館収蔵 31431
- 第9図 (8) 「花巻 鳥屋ヶ崎城絵図」花巻市博物館所蔵 14878
- 第10図 (9) 「花巻城図(花巻御城廓図)」もりおか歴史文化館所蔵 3608
- 第11図 (10) 「花巻城之図」岩手県立図書館所蔵 77011 (22-3-16)
- 第12図 (11) 「花巻城図」もりおか歴史文化館所蔵 03609
- 第13図 (12) 「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻御城図)」花巻市博物館所蔵 16094
- 第14図 (13) 「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻御城図)」花巻市博物館所蔵 17775
- 第15図 (14) 「花巻御城間取絵図—花巻御城地取絵図(花巻御城本丸間絵図)」宗青寺所蔵
- 第16図 (15) 「花巻城全図—御本丸間取絵図(花巻城下図)」岩手県立博物館収蔵 無番
- 第17図 (16) 「花巻御城図—御本丸間取絵図(花巻城図)」十和田湖図書館旧蔵資料 479
- 第18図 (17) 「御本丸間取絵図」花巻市博物館所蔵 30199
- 第19図 (18) 「花巻城本丸間取図」花巻市博物館所蔵 17924
- 第20図 (19) 「花巻城御城地取絵図—間取絵図(花巻城御城地取絵図)」花巻市博物館所蔵 25236

○表

表1 三ノ丸居住の御給人

○参考文献等

- 1 花巻市商工観光課(1979)『花巻城址保存調査書』昭和54年2月
- 2 花巻市教育委員会(1988)『図録 花巻城—城下町の形成—』昭和63年3月25日
- 3 花巻市教育委員会(1989)『図録 花巻城Ⅱ—武具と社寺—』昭和63年3月4日
- 4 花巻市教育委員会(1990)『図録 花巻城Ⅲ—城下町の文化—』平成2年3月
- 5 花巻市教育委員会(1991)『花巻城跡 平成2年度発掘調査概報』平成3年3月31日
- 6 花巻新渡戸記念館(1992)『第四回企画展 花巻城と城下町』平成4年7月26日
- 7 花巻市教育委員会(1996)『花巻城跡—三之丸発掘調査概要—』平成8年3月31日
- 8 花巻市教育委員会(1997)『花巻城跡 平成4・5・6年度発掘調査概報』平成9年3月31日
- 9 花巻市教育委員会(1998)『花巻城跡 平成6年度発掘調査報告書』平成10年3月31日
- 10 花巻市博物館(2004)『花巻市市政50周年記念 花巻市博物館第2回企画展花巻のあゆみ』平成16年10月24日
- 11 花巻市教育委員会(2005)『平成16年度 花巻市内遺跡発掘調査報告書』平成17年3月31日
- 12 花巻史談会・花巻市歴史年表編集委員会(2005)『花巻市市政50周年記念花巻市歴史年表』平成17年3月1日
花巻史談会
- 13 花巻市教育委員会(2012)『平成22～23年度調査花巻城跡 花巻市内遺跡発掘調査報告書』平成24年3月31日
- 14 花巻市博物館(2017)『平成29年度花巻市博物館テーマ展 花巻城跡 展示図録』平成29年9月16日
- 15 花巻市博物館(2019)『花巻市博物館開館15周年特別展 花巻城—南部領の成立と展開—』令和元年8月2日
- 16 花巻市教育委員会(2020)『図録 花巻城Ⅲ』平成2年3月31日
- 17 花巻市教育委員会(2021)『花巻城跡 令和2年度発掘調査概報』平成3年3月30日
- 18 花巻市教育委員会(2022)『令和2年度調査 花巻城跡発掘調査報告書』令和4年3月31日
- 19 花巻市教育委員会(2025)『花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集 平成30年度～令和5年度 花巻城本丸発掘調査報告書』令和7年3月21日
- 20 神山仁(2025)『城郭修復図の研究—幕府を畏れ全国の大名が提出した城絵図の展開』平成7年8月1日 戎光祥出版(株)
- 21 中村隼人(2025)「花巻城本丸御殿の建築」令和7年9月13日「花巻城展」講演会資料 花巻市文化財センター

キリスト教宣教師が記録した明治初期の花巻について

花巻市博物館市史編さん室 布 臺 一 郎

1. はじめに

これまで筆者は「ある花巻出身者の渡米記録について」と題して、明治時代に米国に渡った花巻出身者を小論にまとめてきた。言語も文化も異なる米国で、近代初期の花巻出身者が現地でどのように生き、その生き方がどのように感じられたのかを調べるのが目的だった。最近、別の新しい人物で明治に渡米した花巻出身者を見つけたので、再び調査を始めた。調べている最中に、明治初期の花巻を訪れた英国人キリスト教バプテスト派宣教師の記録集を米国イエール大学のデジタルアーカイブの中に見つけることができた。花巻における明治期のキリスト教布教状況については、1908(明治41)年創立の日本キリスト教団花巻教会の来歴に触れられていて、創立以前の活動として「1880年11月 花巻浸礼教会設立(ポート宣教師の第3回東北伝道旅行において)1885年 花巻浸礼教会解散、盛岡浸礼教会(現・内丸教会)に合流 ただし、教会が解散となったその後も、花巻での集会は定期的」¹と簡単な記述のみで、当時の詳しい状況は窺えない。こうした中、今回発見した“Baptist Missionary Magazine(American Baptist)”²「バプテスト宣教誌(アメリカ・バプテスト)」は、昨年2025(令和7)年7月にアップロードされたばかりの史料であり、この中の1881(明治14)年発行の第61巻から1904(明治37)年の第84巻まで、花巻に関する記事が合計25件書かれているのがわかった。この史料には花巻での布教活動の始まりとその様子が外国人宣教師の目を通して語られているほか、1885(明治18)年に花巻浸礼教会が解散した後、斎藤宗次郎の受洗や無教会活動の始まりの様子も書かれている。斎藤宗次郎は1900(明治33)年以降のキリスト教布教の経過を詳しく書き残しているが、バプテスト宣教誌はその20年前から花巻の様子を記述しており、これまで参照することのなかった貴重な一次史料と言えよう。本小論ではこのバプテスト宣教誌から花巻に関する記事を抜粋し、筆者の和訳によって報告する。

2. キリスト教バプテスト派の花巻での布教の始まり

1881(明治14)年発行のバプテスト宣教誌第61巻は花巻での布教の始まりを次のように記録している。

T.P.ポート師³からの日本の手紙 1880(明治13)年10月11日付 仙台発

¹ 日本キリスト教団花巻教会「教会の紹介」<https://www.hanamaki-christ-church.jp/%E6%95%99%E4%BC%9A%E3%81%AE%E7%B4%B9%E4%BB%8B/>(閲覧2026/1/7)

² Yale University Mission Periodicals Online:Baptist Missionary Magazine (American Baptist) <https://guides.library.yale.edu/misionperiodicals/baptistmissionarymagazine> (閲覧2026/1/7)

³ Thomas Pratt Poate (1848-1924) 英国生まれのバプテスト派宣教師で花巻も含めた東北の開拓伝道に尽力した。ポートの活躍についてはこの分野での集大成である三原圭子、長坂綾子、横山ユウ『初めに言ありき：宣教師ポートの東北伝道』、2022が詳しい。

(18ページ) ひとつの良い展望 盛岡から25マイルこちら側にある大きな町、花巻で働いている若い人がある。彼は聖書⁴とトラクトを売っている。彼は持っている全てを売りつくしたと手紙を寄せ、盛岡の私のもとに戻ってきた。(工藤⁵兄の家は宗教書物の倉庫になっている。) その前途は本当にとっても良い。神はそれをそこでも認めてくださり、我らの主イエス・キリストの名のもとに信ずる人々を見つけるかもしれない。

T.P. ポート師からの日本の手紙 1880 (明治13) 年12月3日付 横浜発 (44ページ) (略) 花巻 盛岡へ戻る途中の10月13日にこの町に着いた。人口はおよそ1万人である。我らの主の良い導きで聖書販売人であるイキダ⁶が滞在している宿にまっすぐに来た。彼の聖書の売り上げはかなり多く、聖書とトラクトを仕入れに盛岡に2回行くことを余儀なくされ、更に良いことには、真理を受け取るために人の心を主が開いていることがわかった。私はここに10日間滞在し、主は明白な方法で私とともにいた。この仕事のために特別な祈りが横浜でなされていたことが後でわかった。その祈りは答えられた。15歳の少年がひと月以上聖書を学んでいたが、キリストのもとに来た。彼は多くの迫害に遇ったが、イキダは私に「彼の心は平和と喜びに満たされていて、迫害は彼に何の影響も与えていない。」と言った。概して私は興味のある人のためにだけ集まりを持ち、大きな集会は開いていない。ある集会では7人が17分冊の新約聖書を購入するために集い、それから他の二人も同じように購入した。ここでの滞在中、イキダはまた在庫を売りつくし、私が盛岡へ行ったときに補充するため、私に同行した。私は主を信ずると告白した3人を残した。(略)

(45ページ) 特別な祈り 盛岡に10日間滞在してから、花巻に戻った⁷。私がいないうち、イキダは忠実に働いており、精霊の力は彼とともにあった。私には彼が恩寵の中で成長していると分かった。我々は主に10人の魂⁸を願うことで合意した。そしてとても豊かにそれを為すことができる主はお聞きになり、答えてくれた。以前と同じく、大きな集会は開かれなかった。人々が一人、二人、三人と一度に来て、その人たちの心を聖書の言葉を受け入れるように神が開き、聞き、そして信じた。それは集中的な働きの時であり、主の存在が我々を喜ばせてくれる時でもあった。私は土曜日に宿を変え、60歳の老いた男性である花巻で唯一の受洗した信徒⁹と会った。彼は

⁴ 1879 (明治12) 年、キリスト教バプテスト派日本初代宣教師ネイサン・ブラウンによって出版された日本初の新約聖書の全訳、「志無也久世無志與 (しんやくぜんしよ)」を指していると思われる。学校法人関東学院大学「日本初の新約聖書『志無也久世無志與』」<https://kgulibrary.kanto-gakuin.ac.jp/wysiwyg/file/download/1/152> (閲覧2025/11/18)

⁵ ハリストス正教会にいた工藤順造 (順三 徳太郎と表記している文献あり) を指している。1879 (明治12) 年5、6月頃、横浜でバプテスト教会の集会に出席し、聖書を携えて帰郷し研究の結果バプテスト派に変わった。高橋楯雄「日本バプテスト史略上」東京三崎会館、1923、p.70

⁶ 花巻で最も早くバプテスト派の伝道を行った池田清道を指している。池田はポートによって1880年5月30日、宮城県志田郡古川町 (現 大崎市) の御代川において、清野友之進、熊谷直衛とともに受洗した。なお、この3人は後述するハリストス正教会から移った大坂徳治の影響を受け洗礼に至った。高橋 (1923)、p.p.74-75 池田は1858 (安政5) 年3月10日、宮城県名取郡岩沼村 (現 岩沼市) で生れ、1911 (明治44) 年7月15日、福岡県大牟田で死去。高橋 (1923)、p.74,p.77

⁷ ポートは盛岡に10日間滞在した後、花巻に戻ったとされ、この日、1880 (明治13) 年11月10日に最初の花巻浸礼教会が設立された。高橋 (1923)、p.79

⁸ 主は言われた、「わたしはその十人のために滅ぼさないであろう。」(創世記第18章32節) 日本聖書協会、口語訳聖書、1955

⁹ ハリストス正教会において洗礼を受けた大坂徳治と考えられる。高橋 (1923)、p.74

クリスチャンと会えて非常に喜び、新約聖書と補充したトラクトを買ってくれた。彼はギリシャ教会から洗礼を受けていた。(下線は筆者)

上記の下線部分が示すように、花巻を含めてキリスト教が伝播していく過程では、先行して布教活動がなされていたハリストス正教会信徒の存在が重要と考えられる。脚注5で示しているように、そもそもポートの伝道がハリストス正教会の工藤順造と出会って始まったように、花巻でもハリストス正教会の活動を下地にしてバプテスト派の布教が始まっている。次の引用¹⁰はハリストス正教会の記録からであるが、ハリストス正教会の司祭が1年にわたってバプテスト派の信徒に説教したことが書かれており、記録者である宣教師ニコライが憤慨を呈している。ここからわかるように、花巻のような場所では宗派の違いを超えて、地域のキリスト教信徒が外国人宣教師の心配を他所にして、自由に交流しているのんびりとした様子が窺える。

1881(明治14)年5月30日(6月11日)、土曜。盛岡。

朝、人首の信徒4人やってきて、かれらの所に伝教者をよこしてくれるよう依頼してきた。(略)盛岡への途中に信徒がいるところが二カ所。花巻と郡山。花巻は1200戸ほどの町。そのうち200戸ほどが士族。かつてここで伝教を始めたのはペトル大立目。当時は聴教者たちがいた。そのうちの一人、マトフェイ小田島はいまでもこの地に残る二人の信徒のうちの一人である。当時ペトル大立目が、聴教者の家から駿河台の学校に行かせるために二人を選んだ。生徒のモイセイ照井とエヴゲニイ蛇口がそれである。いま、イオアン西海枝(勝巳)が今年の公会でここに任命され、9月以来住んでいるが、月々15円ももらっていないながら、丸々一年なにもしなかった。(略)西海枝はといえば、わたしに機嫌を直してもらおうと、「一年何をしていたか」という質問には、宿屋の向かいにあるプロテスタントの会堂に呼ばれて、そこで説教しました、などと言う。(略)なんたる頓馬！これが腹を立てずにいられようか。これではプロテスタントの会派、バプテストに奉仕するために伝教者を養わされているようなものではないか。(略)(下線は筆者)

3. バプテスト派の教勢

バプテスト宣教誌には折に触れて、その時点での地域ごとの信徒数等、統計数値が記録されている。1881(明治14)年発行のバプテスト宣教誌第61巻時点での教勢を見ると、花巻は他の地域と比べ人口が少ないにもかかわらず、受洗した教会員の数を一定数維持しているのがわかる。次の統計ではバプテスト派の信徒が労働者階級に属していると表現しているが、上述のニコライ宣教師の記録では布教の対象として士族を重視している様子が見えるのが両教派の違いとして特徴的である。なお、次の引用からわかるように、1881(明治14)年の文書において、花巻では6人の教会員となったキリスト教信徒

¹⁰ ニコライ『宣教師ニコライの全日記 第2巻』(長縄光男・高橋健一郎訳)株式会社教文館、2007、p.46

が確認できる。後述する斎藤宗次郎の受洗より19年前の文書に花巻のキリスト教信徒の存在が記録されていた。

(46ページ) 花巻は、私の信ずるところ、主から我々に与えられているところである。そこではギリシャ教会¹¹もローマカトリック¹²もまだ押さえていない。この町ではイキダがよく働いている。非常に多くの本が売られていて、人々はとても素晴らしい精神を示している。受洗した者たちは全て労働者階級に属している。

統計—盛岡教会11人、花巻教会6人、仙台教会9人、合計27人 (下線は筆者) 我々は死亡によって盛岡教会の2名を失ったが、それぞれの教会には数名の受洗候補者がいる。

(254ページ) 日本人へのミッション ブラウン師夫妻、ベネット師夫妻、ポート師夫妻、サンズ女史 (略)

北部 教会3、すなわち盛岡¹³、男5、女6、合計11 花巻、男5、女1、合計6 仙台¹⁴、男8、女1、合計9 男性会員18、女性会員8、合計26 (下線は筆者)

4. 花巻でのキリスト教迫害の様子

花巻におけるキリスト教への迫害については斎藤宗次郎やその家族に対するものがよく知られているが、その約20年前の1881 (明治14) 年当時の迫害の様子がバプテスト宣教誌に書かれている。

(325ページ) 花巻では多くの迫害が起きている。兄弟たちのうち2名が苦しんでおり、私の信じるところでは、今も真理のために苦しんでいる。彼らのうちの一人は養子の息子である。彼はその家の一人娘と結婚し、相続人となった。彼の養母はキリスト教に激しく反発していて、もし信仰の告白を控えないならば、娘から離婚させ、その家から追い出し、代わりに別の息子を養子に迎えると彼に言った。彼は妻を愛していて、この試みは激しいものになっている。主が彼を留めてくださいますように。(略)

5. 花巻浸礼教会の解散

上述の1で引用した日本キリスト教団花巻教会の歴史では「1885年 花巻浸礼教会解散」とだけ記載されているが、バプテスト宣教誌の記録によるとその理由は教団内部の経済的なものであり、他の教会では洗礼の候補者が育っているにもかかわらず、花巻ではその候補者がいなかったため、教会の維持を断念したものと思われる。

¹¹ 「ギリシャ正教」と表記されているが正しくは「ハリストス正教会」である。ハリストス正教会は1880 (明治13) 年9月以降、イオアン西海枝 (勝巳) という司祭が花巻に任命されたとあり、既に伝道の拠点が設けられていた。長縄他 (2007) , p.46 なお、西海枝司祭は、1874 (明治7) 年7月、盛岡ハリストス正教会の2番目の受洗者である。正教時報社『正教時報 (1189)』正教時報社、1989、p.19

¹² カトリック花巻教会の設立は1887 (明治20) 年前後、「花巻城跡、小学校の向いの坂の上に伝道所があった。」との証言がある。上田哲・ホーレンシュタイン『岩手福音宣教百年史』岩手カトリック宣教再開百年祭実行委員会、1974、p.66、p.66

¹³ 現在の日本キリスト教団内丸教会

¹⁴ 現在の日本キリスト教団仙台ホサナ教会

バプテスト宣教誌第65巻 1885(明治18)年
(288ページ) 八戸では6人の洗礼者だけとなっている。9月以来彼らを訪ねることができていないが、洗礼の候補者は数人おり、私の信ずるところ、その働きは深まっている。花巻では受洗者がいない。花巻は盛岡から12マイル少しと近いので、花巻を盛岡の説教者の担当とした¹⁵。

1885(明治18)年10月1日付 横浜発
(460ページ) 花巻 ここでの見通しは励まされるものとなっている。しかし、来年の働きのための補助金が大幅に減額されることから見て、この働きを盛岡の説教者の担当(下線は筆者)とし、千種¹⁶を八戸に派遣することが賢明だと考えられた。

しかし、花巻教会が解散したのちにも、花巻では布教活動が継続されていたことがバプテスト宣教誌に記録されている。

バプテスト宣教誌第68巻 1888(明治21)年
1888(明治21)年8月6日付 盛岡発
(425ページ) (略) また、先週のうちに彼らは我らの古い出張所で、我々から25マイル北(ママ)にある花巻での働きを始めた。彼らのうち二人¹⁷が自分たちの経費で交互に行くことになる。これは非常に健康的な兆しで、祝福を探している我々を勇気づける。

1888(明治21)年10月25日付 盛岡発
(25ページ) 我々は再び花巻で仕事を始めていて、そこを掌握することを期待している。6月まで私と一緒に勉強した2人は神学校に入るべきである。しかし、助け手の不足により、私は彼らを北の方に留めておかなければならない。
(292ページ) 花巻 集会は維持されていていて、受洗者も求道者もないが、はっきりとした改善が見られる。信徒たちは励まされ、活動的になっている。

6. 斎藤宗次郎についての記載

花巻教会が解散したのち、引き続き花巻において布教活動を続けていたバプテスト派であるが、その布教活動の中で斎藤宗次郎に影響を与えている様子がバプテスト宣教誌に記録されている。次の引用文に出てくるジョーンズ氏は斎藤宗次郎に洗礼を授けた宣教師である。¹⁸

¹⁵ 花巻教会は1885(明治18)年9月15日に解散した。高橋(1923), p.83
なお、花巻教会解散後、信徒たちは盛岡教会へ所属するものと推測したが、内丸教会百年史編集委員会『主に導かれて百年小史』日本基督教団内丸教会、1980にはそれを裏付ける記述は見当たらなかった。

¹⁶ 千種成紀と考えられる。高橋(1923), p.128

¹⁷ ジョーンズ宣教師と武田亀吉牧師と考えられる。八十周年記念誌編集委員会『花巻教会創立八十周年記念誌：一粒の麦から』日本基督教団花巻教会、1988, p.33

¹⁸ 斎藤は1900(明治33)年12月12日、ジョーンズによって豊沢川において洗礼を受けた。斎藤宗次郎『二荆自叙伝10巻』p.432

バプテスト宣教誌第81巻 1901（明治34）年

（707ページ）ジョーンズ氏とともに盛岡（ポート氏が長年奉仕した出張所）を訪問している間、午後と夕方の集會を、今30人を数えている教会と一緒に楽しんだ。そして盛岡の南の花巻では開拓者の経験をし、地元の宿に泊まり、そこでは日本式に食べたり、寝たりした。そして夕方、300から400人の人々の群集が人力車の車庫として前面が使われていたアパートに集まった礼拝¹⁹に参加した。梁がとても低かったので、ぶつからないように注意する必要がある。

（708ページ）その様子は奇妙なものだった。少年少女たちは中心に座り、教師、弁護士、小売商人、人力車引きといった様々な身分からの集団が少年少女たちの周りに立っていた。彼らの多くは明らかに初めて英語というものを聞き、彼らのほとんどは福音というものをよく知らない。集會は11時まで続き、最後の言葉が語られるまで立ち去る人はほとんどいなかった。信仰深い魂の小さな群れがここにいた。リーダーは学校の教師で、ジョーンズ氏の影響によってわずか1年前に救い主に導かれた者である。彼らの集會は明らかに偶然に起きたもので、ある朝に浜辺に起きた。その結果、この男、斎藤宗次郎が改宗し、一人の仲間が生まれることになった。斎藤は彼の妻と父から刀によって脅された。花巻での教師の叙任は失われ、近郊の地域で教師の地位を守りながら、花巻に留まっているが、そこでの彼の影響は暗闇での一筋の光である。彼が主の者であることを疑うものはいない。私は花巻から再び聞くであろうと確信する。

（460ページ）同じ夏、二人の学校教師が驚くべき方法でキリストに導かれた。両方とも貧しい仏教僧侶の家族出身で、必要以上の娘と結婚させるために養子に出したのである。彼らのうちの1人²⁰の経歴は特に注目に値する。彼はクリスチャンになるため、養子先の家族から出ていったが、もしも彼の新しい信仰について黙っていると約束できるならば、すぐに戻るよう頼まれた。彼は戻ったが、沈黙の約束をせず、町の学校での影響から彼を除くために郊外の学校に送られた。このことが彼により自由を与え、そのことで彼は喜んで児童や仲間の教師にキリストの弟子になるよう影響を与えた。結果として、たくさんの集団が集まり、我々はこの町に自活できる教会を間もなく設立できる見通しを今持っている。

斎藤宗次郎のことを大いに期待していることがわかる文章である。しかし、その後斎藤に対するバプテスト派の評価は一変し、斎藤の師である内村鑑三はキリスト教内部に分派をもたらず者として批判される。

¹⁹ この集會は1901（明治34）年5月16日に開かれ、斎藤宗次郎も出席している。「5月16日 基督教演説會を平田座で開く 聴衆4百〇人（中略）1. 人を救ふ真たる神の方法、万国の宣教とは何か—ジョーンズ氏 斎藤宗次郎『二荆自叙伝10巻』p.432 なお、「平田座」は裏町（現在の東町）に存在した。

²⁰ 斎藤宗次郎を指していると考えられる。

バプテスト宣教誌第84巻 1904(明治37)年
(482ページ) ジョーンズ氏、地元の分派

花巻では分派の紛争が始まっている。内村鑑三という名の男が「余は如何にして基督信徒となりし乎」という題の本を書き、これはかなりの売れ行きがあり、この著者はキリスト教の働き手たちが現在まで行ってきた全てのことに失望しており、新しい支配を目論んでいる。彼は北方の島の札幌で既に新しい教会を始めていて、彼自身は正統派であるが、その教会は主としてユニテリアン派²¹である。彼は今、その動きに加わる会員を得るために努力している。彼は既に最後に言及した場所²²で斎藤という名前の若い男を獲得し、斎藤は彼の父の財産相続人になる者であり、内村の改革の努力にとっては輝く印となっている。集会を開こうとするとき、内村氏は我々の最も熱心な求道者たちに通知を送ってくる。

7. むすびにかえて

これまで見てきたように、バプテスト宣教誌の記録によって花巻のキリスト教の布教が誰によって、どのように始められたのかが、1880(明治13)年代から明らかになった。近代以降のキリスト教初期の中で不明だった20年の期間がよりはっきりとしたものになった。また、上述2で引用した『宣教師ニコライの全日記』で描写している1881(明治14)年の様子が示すように、ハリストス正教会の伝道活動が明治時代の早い時期に花巻地域でも始まっていたことがわかった。例えば、「岩手県田瀬教会近況 田瀬教会は(略)今より30年前にイオアン菅谷兄等に依り創設せられ」との記事が1912(明治45)年の文献²³から確認できるが、この記事の言う「30年前」すなわち1882(明治15)年頃には田瀬地区で教会が創設されていたことになる。このイオアン菅谷なる人物は、この時代のハリストス正教会の文献に頻出しているが、「和賀郡田瀬村の豪農、菅谷政蔵は上閉伊郡(ママ)土沢でキリスト教の講演をきいて感激し、明治11年岩谷堂町の陶商たちに勧めてキリスト教の研究をはじめた。」²⁴とあり、田瀬地区のみならず現在の奥州市江刺地区でハリストス正教会の活動を主導した人物であることが今回わかった。筆者は子孫の方と連絡を取ることができ、墓地に案内していただいたが、そこに建立されている墓石²⁵に、「イオアン菅谷は1878(明治11)年、激烈な周囲の迫害にもかかわらず正教会の真理を確信し、ハリストス正教会影田司教によって洗礼を受けた」という文が刻まれているのを確認した。

これまで花巻地方の最初の受洗者は先行研究から、カトリック教会での1878(明治

²¹ 当時の宣教師たちは内村鑑三について次のように批判していたことが、内村の著書に書かれている。「博士の号二三を有する老練なる某宣教師は余はユニテリアンなりといへり」内村鑑三『基督信徒の慰』警醒社、1893、p.42-43 また、1903年7月17日ジョーンズ宣教師が訪問し、「談話中内村先生を誤解して議ある一項をと彼を疑察(ママ)することを聞いて心地悪くあった。」という記事がある。斎藤宗次郎『二荆自叙伝4巻』、p.58

²² 花巻を指す。

²³ 愛々社「正教新報(749)」愛々社、1912、p.22

²⁴ 正教新聞社「正教時報(1076)」正教新聞社、1980-5、p.4

²⁵ 墓石はイオアン菅谷(菅谷政蔵)と妻スサンナ菅谷(キン)のもので、キリスト教の墓石として明治以降の花巻地方で最古のものと思われる。墓地の訪問には菅谷正孝・公子夫妻の多大なご協力をいただいた。(訪問日2025/11/29)

11)年²⁶と考えられていたが、この同じ年にハリストス正教会においても洗礼がなされていたことになる。ハリストス正教会については現在、花巻地域での活動は確認できないものであり、また、現在の市町史においても記述がないため、これまで詳細が不明であったが、布教活動の一端が今回判明した。明治におけるハリストス正教会の影響は重要であるので、今後の研究の必要性を強く感じる。

ところで、上述のようにバプテスト宣教誌に斎藤宗次郎についての記載があったので、斎藤宗次郎のことを改めて調べてみたが、インターネット上に「斎藤宗次郎が花巻初のキリスト信徒である。」と書いているサイトが多数見られることがわかった。このことについて雑賀(2015)は花巻での江戸時代に潜伏キリシタンが存在していたことや、バプテスト派の最初の教会が1880年に設立されていたこと、そして花巻出身者であって1877(明治10)年に札幌で洗礼を受けた佐藤昌介の例を挙げ、斎藤宗次郎自身が「花巻にはこれ迄一人のキリスト信徒もなかった」と書いていることを「厳密には違う」としている。²⁷一口で「キリスト信徒」を定義することはなかなか難しいものであり、例えば洗礼が必要かどうか、また、洗礼は浸礼なのか、滴礼あるいは灌水礼なのかなど、キリスト教の教派によって見解が異なっている。因みに無教会主義では必ずしも洗礼を必要としないと言われるが、斎藤宗次郎自身は上述のようにバプテスト派宣教師のジョーンズから洗礼を受けていて、その洗礼の時の様子を後の日記に「ア、実に花巻に於て公然洗礼を受けしを始めなりき」²⁸と書いていることから、この洗礼の出来事をもって自分を花巻初のキリスト信徒としたと考えていたのかもしれない。しかし、バプテスト宣教誌に記録された1880年の花巻の教会の存在、また、カトリック教会やハリストス正教会での初めての洗礼が行われたのが1878年だったことからすると、斎藤宗次郎の受洗は明治時代以降、花巻最初のものではないということになる。更に「斎藤宗次郎が花巻初のキリスト信徒である」という文言は「周囲からの強い迫害を受けた」というような表現と一緒にあってインターネット上に存在しているが、これまで見てきたように斎藤宗次郎以前のキリスト信徒に対しても強い迫害は起きている。これら「花巻初のキリスト信徒」と「強い迫害」という表現のセットは、斎藤宗次郎のことを宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のモデルとして、キリスト信徒の理想像とするようなキャッチフレーズとなっている。そして、そのようなキャッチフレーズはほとんどの場合、キリスト教会の説教において喧伝されているのがインターネットサイトから窺える。

キリスト信徒として斎藤宗次郎の生涯を顕彰することは重要なことである。しかし、それは事実に基づいて正確になされる必要がある。このことに関連して、『二荊自叙伝』を編集した栗原敦は「斎藤宗次郎『二荊自叙伝』解題」の中の『付「雨ニモマケズ」のモデル問題について』において、次のように述べている。「斎藤宗次郎を〈「雨ニモマケズ」の

²⁶「花巻地方における最初の信徒は現存する最も古い記録によれば明治11年の6月19日プロトランド神父によって洗礼を受けた箱崎ヨウスケという当時19歳の青年であった。」上田他(1974)、p.66

²⁷雑賀信行『宮沢賢治とクリスチャン花巻篇』雑賀編集工房、2005、p.41注1 なお引用文そのものは『聖書の日本164号』p.14とのことだが筆者自らが確認していないので孫引きとした。了承されたい。

²⁸斎藤宗次郎『二荊自叙伝10巻』p.p.432-433

モデル〉として世間に提示することは齋藤宗次郎を世に紹介するためにも、彼の人格と思想(信仰)の理解を深めるためにも、全く正しいこととは思われない。(中略) 齋藤宗次郎の『二荊自叙伝』の紹介にあたった担当者のひとりとして、少なくともこのようなキャッチフレーズやキャッチコピーが誤った固定概念を広め、定着させることのないよう切に願う次第である。」²⁹

本論考で明らかになった齋藤宗次郎以前の花巻におけるキリスト教に関する史実と、齋藤宗次郎の日記『二荊自叙伝』の編者の思いを示し、特にキリスト教関係者に対して注意を喚起して結びとしたい。

参考文献

内丸教会百年史編集委員会『主に導かれて百年小史』日本基督教団内丸教会、1980
三原圭子、長坂綏子、横山ユウ『初めに言ありき : 宣教師ポートの東北伝道』、2022

引用文献

愛々社「正教新報(749) 愛々社、1912、p.22
上田哲・ホーレンシュタイン『岩手福音宣教百年史』岩手カトリック宣教再開百年祭実行委員会、1974、p.66
内村鑑三『基督信徒の慰』警醒社、1893、p.p.42-43
高橋楯雄『日本バプテスト史略 上』東京三崎会館、1923、p.74,p.77,p.83,p.128
八十周年記念誌編集委員会『花巻教会創立八十周年記念誌:一粒の麦から』日本基督教団花巻教会、1988、p.33
齋藤宗次郎『二荊自叙伝4巻』、p.58
齋藤宗次郎『二荊自叙伝10巻』p.432、p.p.432-433
齋藤宗次郎著 原敦、山折哲雄編『二荊自叙伝大正10年-15年(下) 株式会社岩波書店、2005、p.xl
正教新聞社「正教時報(1076)」正教新聞社、1980-5、p.4
正教時報社「正教時報(1189)」正教時報社、1989、p.19
ニコライ『宣教師ニコライの全日記 第2巻』(長縄光男・高橋健一郎訳) 株式会社教文館、2007、p.46
学校法人関東学院大学「日本初の新約聖書『志無也久世無志與』」<https://kgulibrary.kanto-gakuin.ac.jp/wysiwyg/file/download/1/152> (閲覧2025/11/18)
日本キリスト教団花巻教会「教会の紹介」<https://www.hanamaki-christ-church.jp/%E6%95%99%E4%BC%9A%E3%81%AE%E7%B4%B9%E4%BB%8B/> (閲覧2026/1/7)
Yale University Mission Periodicals Online:Baptist Missionary Magazine (AmericanBaptist) <https://guides.library.yale.edu/missionperiodicals/baptistmissionarymagazine> (閲覧2026/1/7)
日本正教会「盛岡ハリストス正教会・聖十字架挙栄聖堂」
<https://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-morioka.html> (閲覧2025/11/21)

²⁹ 齋藤宗次郎著 栗原敦、山折哲雄編『二荊自叙伝大正10年-15年(下) 株式会社岩波書店、2005、p.xl

戦争体験談の収集について ー 戦後80年に際して

花巻市博物館 学芸係 松橋香澄

市史編さん室 三浦友季

1. はじめに

花巻市博物館では、太平洋戦争の終結から80年の節目として、テーマ展「戦後80年 戦争と花巻」(令和7年7月5日～8月24日)を開催した。

本展では、1931年の満州事変から1945年の終戦までの約15年間を中心に、花巻や周辺地域における戦争の歴史を、当時の貴重な資料を通して紹介した。また、花巻ゆかりの兵士たちの遺品のほか、後藤野飛行場から出撃した特攻機の機体を南相馬市博物館から特別にお借りし、県内で初めてとなる展示を行った。

特に昭和20(1945)年8月10日の花巻空襲に関する展示においては、米軍が撮影した航空写真のほか、被災地から発見された爆弾の破片などと共に、2名の花巻空襲の体験談を紹介した。来場者のアンケートからは、実際に体験された方の生の言葉を通して、花巻でも戦争の被害があったことを実感することが出来たという声をいただいている。

本稿では、テーマ展において紹介した釜津田啓子さんと横田元子さんの戦争体験談を掲載する。掲載にあたって一部編集を加えた箇所もあるが、基本は本人の言葉のまま使用する。

2. 釜津田啓子さんの体験

2-1 釜津田さんについて

釜津田さん(旧姓宮沢)は昭和11(1936)年に花巻市上町の「十字屋」に生まれ、戦中・戦後の苦しい時代をご経験された。

テーマ展の開催に伴って聞き取り調査を行い、花巻空襲のことや当時の学校のこと、戦後の上町の様子などを話していただいた。

2-2 釜津田さんのお話

私の家は上町で「十字屋」というお店をしていたんです。今は角ではないけど、もともとはすっかり角にあった。一軒となりが「大正屋」でその次に、金融業をやっている古川さんっていう人がいて、空き家になってたの。まだ父が生きてたからそこを買って、そして元の家を改装していつでも店開けれるようにしたんだって。

古川さんの家は金融業だからね、観音開きのドアがあってね、銀行の窓口みたいのもあったりしてね。そして裏はね仲町まで続いてて、いろいろ木もいっぱい植えてあった。梅の木から、桐の木からなんたり、いっぱい。

戦時中の小学生は何して遊んでらったいね。空襲があまりない頃は縄飛びと、地面にチョークで書いて遊んでたな。思い出すと、ちっちゃい赤ちゃんがいなかったね。同じくらいの子供だけがゴヤゴヤといた。

戦争中のことでいえば、子供はね、上町を掃除するんだってよ。日曜日に朝早く起

きて、馬車が馬糞を落としていくから、皆でずーっと並んで掃くの。公共の仕事でなかったんだね。

それからあそこのひやっこ坂はほとんど子供の遊び場でした。ソリで滑って遊んだの。町の至る所に子供たちがいた。本当に子どもが多い時代だったんだろうね。

それから、食べるものだもんね。まだ戦争終わらない頃かな、みんな違うお弁当を持ってきたった。お弁当に小麦粉をだらっと流してただ蒸しただけっていう人もいる。スプーンで食べるっけ。いいなと思ったりして見てらったけど。お米ない人はそうっけ。

〈中略〉

うちでは父が亡くなった後、子供5人とおばあさんと母と全部女で、うろたえて過ごしました。一番上の長女は花巻女学校から日本女子大に行ったのね。でも、ほとんど竹槍の訓練とかだったみたい。東京でせっかく進学したのに。栄養失調だったと思うけど、1年かそこらで結核で帰ってきた。結局父と同じ年に亡くなった。父が3月で姉は7月だった。

上から2番目の人はね、女学校が終わるやいなや挺身隊に行ったの。先生にお米を持って行った人はね、挺身隊を外されてた。うちは店にあったバターを持って行ったけど、あれではダメだったらしい。そしてね釜石の仙人峠もできない頃、リュックサック背負って山越えて、釜石の捕虜収容所で看護婦の助手をしたの。その時、アメリカ兵のね、服装と靴を見たら、当たり前だ負けるのって思ったって。あんまり素晴らしいの着てて。それから韓国の女の人たちも来てたって。そういうのをね、10代でみんな見てきたようっけ。

女だけだといろいろ大変なこともあったよ。何か書類とかあるでしょ、それを聞きに親戚に行くと、始めは良くてもあとは「あらまた来たか」っていう感じになるって言ってさ。

重大な決断の時はね、おばあさんと母と二人で拜むところに行くっけ。焼けてしまったあと、いくらかの残ったお金で家を建てようとか、そんな時はそうっけ。あらまたあそこに行ったなと子供心に思った。

空襲が近づいてきた頃はね、うちの姉なんかは靴はいたままで寝たな。夏だし、布団に入らないで、ちょっと一段高くなった上がり框かまちのところがあったのね。そこさ寝るんだっけよ、いつでも起きれるように。夏なのに、ちゃんとみんな活動着たまま寝るの。防空頭巾を枕元に置いて、靴も履いて。

当時は、どこの家さ行っても天皇陛下二人の写真を飾ってたんだよ。我が家では乃木大将のものがたくさん飾ってあった。よっぽど好きだったんだね。

学校には天皇皇后両陛下の写真が飾られている奉安殿があって、最敬礼をしてからでないと校舎に入れなかった。教室には天皇陛下の写真はなかったけど、私らの教室にはね「中庸」という文字が掲げられていた。中国の言葉でちょうど中間っていうかほどほどという意味の様だけれども、それが子供の心にも、なんでこれなんだろうって不思議だった。

そしてね、漢字テストなんかの紙もなくて、お家に紙ある人はそれを持ってきてやったの。私はね、一升瓶に貼ってたラベルを持って行って、ちっちゃく字を書いたのを覚えてますね。

紙不足だったから、通信簿も表裏の1枚しかなくてペラペラだった。

そのころ男の先生って少なかったんだけど若い人なんかもいてね、朝礼の時にまっすぐに並ばないと足を引っ掛けて転ばされるのよ。もう軍隊式。女の子にも男の子にも。私も眼帯かけてる時に、列からちょっとずれてたから不意打ちされたった。それから女学校の姉たちはね、朝礼のときに手がピンってなっていないと、女の先生にバチンバチンってデコピンされたって。忘れないんだっけ。

〈中略〉

昭和19年か20年ぐらいに、教室も狙われるかなと思ったんだか、鳥谷崎神社の広い部屋に移動して授業したことがあった。なんでここで授業するのかと思った。そして校庭の一画に鬱蒼とした林があって、そこに隠れる練習もした。今の幼稚園があるあたり。行ってただしゃがむだけだけどね。飛行機来たぞとかって。

それから戦争が激しくなったら、今度はやっぱり兵隊さんの真似して裸足で日居城野まで、行軍をしたの。あれは1回しかしてないけど、とっても嫌だった。日居城野に行くのに、早坂を降りるわけ。デコボコとした石の道を。一日市、四日町はねコンクリートだからスタスタと歩くけど、何のために裸足なんだって思ったね。鍛えるためだったんでしょね。今日は重労働だったって思ったった。3年生頃だなあれは。

そうしているうちに戦争が激しくなってきた、授業中にもサイレンが鳴るんだ。ああ落ち着かないって感じで、震えるっけ。ガタガタガタガタって。あのサイレンってさ、ラの音なのね。オルガンで弾いてみたら、とても不気味な音なの。あれがけたたましく鳴っていた。ウウウッ～って言って一旦止まってまたウウウッ～て、なり続けるんじゃないかってちょっと止まってまた、ちょっと止まってだったからさ、ほらほらって急かされている感じするの。

サイレンが鳴ったら、帰る支度をしてもう帰りなさいって言われたった。走ってお家に帰りなさいって。肩からかけるカバンだったけど重かって思って走って帰った。当時は下駄だしね。

その頃東京から疎開してきた人がたくさんいた。毎日のように来るんだ。教室でも今日はこの方がね東京から来まして、仲良くしてくださいって言ってね。東京の人とお友達になったりしてさ。大正屋さんにもいっぱい来てた。でも、戦後みんな一斉に帰ってしまった。

うちの向かいがね岩手銀行だったの。そうするとね昼はね軍歌が聞こえるのよ。みんな歌ってるの。銀行の行員さんたちが歌う歌だってさ、労働歌でないんだよ、軍歌なの。あんまり聴いたことない歌だった。

それからね、上町を歩くと、大津屋さんのウインドウさ「聞けサイパンの声を」っていう、すごいビラが貼らさってたの。鉄かぶとかぶってさカーツとしてる兵隊さんのね生々しいポスター。聞けって言うわけだ、国民よって。それから藤井病院って

いうところの待合室の中でよく遊んだりしてたけどね、そこではね、占領されるとこういうことも起こるぞっていうことを書いて貼ってる人もいるわけ。共産主義の人なんだらうね。非常にひどい目に合うぞっていうことを書いてるの。子供の心にも衝撃だった、怖かったです。

でも、誰もこういう恐ろしい戦争をしてるっていうことを言わなかったの。うちのおばあさんたちはほら、日清戦争とかでいつも勝ってるから「必ず神風が吹いて、勝つことになってるから」って感じだった。

藤井医院では長男が軍医として出征していた。戦後帰ってきてたが、家族を連れて東京に出てしまった。おばあさんが一人、家に残ってた。

8月10日は、隣のみおちゃんと朝10時頃に大津屋の裏の防空壕に行きましようって行ったの。大津屋さんの裏に広場があって、そこに上町の人たちで共同の防空壕を掘っていたんです。地面から2段、3段掘り下げて、土饅頭みたいに土を盛って扉を付けたような防空壕だった。そんなに大きくなって、子どもが何人か入れればいっぱいになる程度のものであったから、格好の遊び場だった。

遊びに行く気だったから、煎り豆とかなんか持ってって、学校の教科書は持たなかったの。それが大失敗だった。空襲でカバンも教科書も焼けてしまったの。ただ遊びに行くだけのつもりだったからね。とにかく焼けてからでも即学校はあるのね。そんなに被害を受けてない人もいっぱいいたから。教科書が無くて恥をかいた。戦後、先生に言われた通り自分たちで教科書に墨入れする日があっても、私は教科書がないからね。そしたら友達に借りて、うちの姉達が写してくれたの。当座のとこだけでもね。それでも、焼けてしまうってことはこんなにひどいことかと思った。

とにかくその日は、遊びさ行ってぺちゃくちゃ喋ってるうちにサイレンが鳴ったような気がした。たちまち飛行機来たの。すごい低空飛行だっけ。そしたらキューって降りてきて、爆風で防空壕の扉が飛んで行ってしまった。あれを見た人は、パイロットの人とすっかり目と目合うって言っていた。

上町ではね川勝さんっていうところのお母さんが窓から顔出したってね。見ようと思って。だから撃たれた。それから花巻駅もだっけね。駅は人がいるんだもんね、必ず。ただ火がないから火事は起きなかったけど。

上町では火事が起きてしまったけど、飛行機が飛んでるから火を消さないわけだ。だからダダダダダダと燃えた。上町からずっと、双葉町から豊沢町、下町、御田屋町の手前まで、それから豊沢町の川の手前まで燃え続けた。普通の火事だと途中で消すから柱なんか真っ黒くなって残るでしょ。ないのね。全部見渡す限り焼け野原ってあのことだっけね。

大した偉いおばあちゃんいたの隣に。大正屋のおばあさん。逃げないの。家の間に溝があるの。そこさいるんだって。私は見てないけどうちの姉は言ってる。空襲が止むまでそこにいるけって、どこさも逃げないで。ギリギリまで逃げないでだ。

次の朝ね、私もよそのうちに泊まって、早く自分の家のとこまで行ってみたら何にもなくてさ。したら、大正屋のおばあさんがもう働いてるの。自分の家の焼け跡のあ

れをトタンだのね、こうやって何かあるかと思ってね。気丈だった。

〈中略〉

うちの年寄りや母たちはあれだけ、夏の布団を頭からかぶって押し入れさ隠れるんだっけ。防空壕もちょっと遠いよ。花城庵の下の、今あそこ埋め立ててしまってるけど、あそこ池だったの。鯉屋さん家。鯉を飼ってる人の池だったの。大正時代はもうガンと凍ってあそこでスケートもできた。今の市役所の駐車場になってるところ。教会の向かいでね。そこが広い池だったの。崖はうっそうとしていた。そこに穴を掘って防空壕を2つあったんだけど、その2つの方の片方にはなんか大きくないような爆弾が落ちた。その爆風で教会なんかちょっと扉が壊れていたっけ。もうひとつには、みんな掘らなかった人も通行人も知らない人いっぱい入ったの。私は大津屋さんのところから、まず家に行ったら誰もいなかったの。じゃああそこさ入ったんだな大きな方になって思って走ったっけ、今来ないでって言われた。(飛行機が)飛んでるから来ないでって言われたけど、知らねえと思って走って入った。中は洞窟のように掘って真っ暗ですごく大きかった。人もいっぱい入っててどっかの病院の患者さんたちもみんな入ってた。家族もそこでみんな隠れていた。

夕方までみんな入ってた。飛行機があっちに飛んだりこっちに飛んだりしてたからね、出れないんだ。飛行機来なくなったなーってなってから、みんなそこから出てきたの。なんだか、すごい眠たくなっただけ。

私はその晩どこさ泊まったと思う？賢治さんの一番下の妹、宮沢クニさん、あそこを一晩御厄介になった、みんなで。ただ、ずっと長くいるわけにかなかった。そこも子供さんいっぱいなの。その次の日からは、今度はもう一人の父のいとこ、仲町の岩田さんってさ、上町の岩田さんのご兄弟、上町の人の子だったけど、そのお二階をお借りして随分長い事借りた。隣の家も貸し屋だったっけから、そこが空くまで御厄介になったよ。でもゆるぐなかった。あっちも嫌だったんでしょ。それでもしばらくはいたったよ。その小さい子どもを子守したりさ。みんなお互いに助けなきゃって感じだったんでしょ。受入れた家でも、いやー大変だと思ったったこったよ。自分ちもいっぱい子供いるのに。

どのようにして一晩暮らしたかよく覚えていない。とにかく早く自分の家さいってみようと思ってね。一晩中は燃えてらっただらしい。私はその燃えるところは見ないけど、見た人はやっぱり赤々と燃えてたと言っていた。

次の日、家の焼け跡に行ってみたら、家族でみんな履いた長靴なんかデロデロになってね、こんなゴムの塊になってた。水道の管はこんなに曲がってね。

店閉めたばかりだから、いっぱい缶詰あったの。焼け残ったけど、振ってみたらそれが全部カタカタ！もう中で炭になっちゃってた。それが山のようにあった。

まあね、でもホッとしたのさね、焼けたあとはラ音は聞こえないから。10日以降はサイレン鳴らなかったよ。それまではずっとサイレンはほとんど毎日のように空襲来るまでは鳴ってた。警戒警報と空襲警報と、サイレンの鳴り方がちょっと違うんだっけ。ずっとうーんと何回も鳴るの警戒警報は。短く鳴るのな。だからこれだらまだい

いやって思ったの。

戦後、女の子たちにはみんなシラミがたかったの。男の子はほら坊主だからないけど。そしてね、とにかく学校から帰ってきて、必ずおばあさんが髪をすくと白い紙を敷いて、するっと落ちるんだよ。それをピチッと潰すとね、みんな血が出るの。教室だと前の人のセーラー服の襟にね落ちてるの。皆やっぱりうんとこまい櫛ですいたみたい。

それから落穂拾いをさせられた。食糧難だったからね。あと、燃料として杉っ葉拾いもさせられた。

そうしてるうちに、学校で給食が出るようになったけど、釜石かなんだかのわかめ汁。ドロドロになったようなわかめでさ、そのおつゆ、暫くそれだけだった。その次がララ物資って、アメリカの日系人ね、その人がくれたってね。その脱脂粉乳、あれで助かった。美味しくないっていう人もいるけど、やっぱりたっぷり飲ませてもらってね。

それからトウモロコシの粉っていうのがね配給された。真っ黄色の粉で、それでパンをふかすんだっけ。当時パン焼き器が流行ったのよ、この真ん中煙突でくるっとアルミできてきてるやつ。そこさ粉流して七輪にかけると、パンができるのね。真っ黄色でうまそうでしょ。でも、食べるとすごいゴソゴソだった。うちはちょっとお砂糖があったもんで入れてはもらったけど、粉自体がね粗いの。あれをもっと擦ればいいんだろうけどね。真っ黄色でうまそうなんだけど。でもね、お腹すけば食べるっけ。ただいまって帰ってきて、何かないかって言うとき、これならあるよって言われればね、食べたもんだ。

それから、うちでその角にいった時そこも焼けたでしょ。そしたら、その通りに引き上げてきた人たちの更生市場ができたの。一間ずつ与えられてそこでね、いろいろなお商売をして、飴っこ売ってる人がいれば、あと天ぶら屋さんっていう人がね、いったな。東京にいったらしいっていうんでさ、すごく上手なのよ。そんなに材料もいっぱいないんだけど、綺麗に揚げるの。中華鍋に油少しで、それでちょっとしたものを揚げるんだっけ。このくらいの油で揚げれるんだなって思った。銀行の人達なんかもちっと昼のおかずにお買いさくるっけ。いっぱい作らないんだけど、売れるくらい揚げるっけ。あれから勉強したっちゃ、あんまりナミナミの油でなくても揚げるにいいんだなと思ってね。あんまりこんな大きな天ぶらじゃなくて、可愛くちっちゃく揚げるっけもん。だからその程度の油でいいんでしょ。魚っことか揚げた。

お腹すいて帰ってきて、何かあるかって言ったら、うちの母親にさ、誰か飴っこ売ってる人からこのくらいの袋さ5つくらい飴っこ買ってきて、はいこれ食べてって言われてさ。え一言わねばいがあったと思うっけ。なんとも言われない気持ちでさ。だったらおにぎりが良いとかっては言えない感じだったね。あんまり持ってねお金で買ったんだなと思うとき。

〈中略〉

戦前にね、うちでは賢治さんの影響でレコードを売りはじめたの。そしたら、コンピヤの出張員がうちの父とお付き合いしはじめてね。花巻が焼けたと聞いて、戦後

も来てくれたの。家借りて住んでいる時。本当にいい人だった。一緒に遊んでくれたり、お話をしてくれたり。

その人も、広島に原爆が落ちた後、会社のお仕事かなんかで広島に行って、そこで被爆したの。だから60代で若くして亡くなったの。クリスチャンだったから、原爆の日になると一日籠って祈り続けたんだと。私のお手紙にも丁寧にお返事をくれた。岩手山とか早池峰山が好きだって言って、花巻にも何回も来てくれた。美男子で優しく、言葉も良くて、戦後のちょっとした救いだった。その人にだいふ助けられたと思ってる。

戦後、戦争の本を読むと、なんて日本はむごい事をしたのだろうって思った。ご近所にもお父さんの兄弟3人戦争に取られたって人もいる。笹間のひとで、結局その人のお父さんだけが帰ってこなかった。私の父も早くに死んだけど、戦争に行った人とは比べられないもんね。

こういう時代の上に、今の平和があるんだと思ってる。だから、テレビとかで美味しいものを食べる話ばかり見ると、ものすごくバチが当たるような気がしてしまう。学徒出陣とかも、聞くだけでもあまりに恐ろしくて、可哀そうで、なんかね、そういう人を思うと、全然何でも我慢できるなって思う。

3. 横田素子さんの体験

3-1 横田さんについて

昭和9年(1934)生まれの横田さん(旧姓佐藤)は、東京から祖父の故郷である花巻へ疎開し、花巻空襲を経験された。

空襲の記憶を残したいと、博物館へ送られた手紙から抜粋した。

3-2 横田さんのお話

毎年、8月6日、9日の広島、長崎の原爆記念日を迎える度に被爆体験者が減ってきて、後世に伝える人がいなくなります中、私も花巻でのおそろしかった空襲の記憶を残してみようと思います。

東京から4年生の夏に花巻に疎開して花巻国民学校に転校しました。一日市裏の小さな家に母、姉、私、弟の4人です。5年生の20年8月10日真昼だったと思いますが突然の空襲にびっくり、防空壕などあるわけもなくあわてて姉弟3人押し入れに入れられ、首だけ突っ込んでおりました。

アメリカの航空母艦がもう近くの海(釜石とか聞きましたが)から艦載機が飛んで来て、高い建物などないのでブーと低空から屋根の上まで降りて来て、あたり一面真っ黒、真っ暗になりダダダダダーというすさまじい音と飛行機の風圧で、家の中の棚の上から物が落ち、台所ではすり鉢などが落ちて割れ、玄関の壁がくずれ落ちて、そこにあったニワトリ小屋がこわれて2羽の白いニワトリが、ワーと下に降りてくる飛行機の風圧で空に舞い上がり、それを目掛けて機銃掃射をしているのが身近に感じました。母は気丈に家の中で何か落ちたり、すさまじい音がする度に、家の中を走って見守りに行くので「行かないで!ここに居て!」と叫んでいました。

遠く爆弾が落ちる音も聞こえました。後に駅前に大きな穴が開いて水がたまっていました。列車通勤をされていた先生方何人か亡くなったと聞きました。その中のお一人は女の及川先生でした。

当時住んでいた一日市町を「こっち街」、豊沢町方面を「あっち街」と呼んでいましたが、あちらは火災が発生してすっかり焼けてしまいました。

やっと攻撃が収まってあたりが静かになった時、近所でお世話になっている佐藤セキおばさんが急ぎ飛んで来られ、「大変だ！アメリカ兵が上陸して来るから早く逃げねば」と誘われ、先ずは子ども達が先に、母は後からオニギリを持ってきて山へ逃げ一夜は山で野宿しました。蚊に刺されながら、花巻のあっち街が火災で焼けてゆくのを、悲しく見ておりました。

5日後の8月15日終戦記念日には、我家のラジオが東京から持って来た物だから性能が良いのではと大勢大人の方々が集まって来ておられました。天皇陛下の玉音放送が終わっても私は何も分からず、大人達は誰も何も言われず勝った！とか負けた！より「戦争は終わったの？」と何度も聞いておりました。ただただ空襲がない事を願っていました。当時ラジオから流れてくる戦況は日本が勝っている事ばかりですし、私達は「欲しがりません勝つまでは」と我慢しながら、いずれ日本には神風が吹くと信じていましたが、先ずは終戦になった事がうれしかった気がします。

東京から遠い岩手県花巻に疎開して迄も空襲に会うとは思っても寄らない事でしたが、東京に居ても祖父の家へB29から焼夷弾が18ヶ落ち全焼してしまいました。終戦後東京へ帰る家もなく、花巻国民学校6年卒業する迄お世話になりました。

花巻に疎開する事になりましたのは、戦争が激しくなり、学童疎開が始まり、姉と私は集団疎開に行く事になり、各々荷物も出来上がっていましたところへ、突然父に赤紙（召集令状）が来ました。当時「人生わずか50年」とか言われている頃に40歳半ばの父は3日後には丸坊主になって東京品川駅から貨物列車に乗せられて出征してしまいました。その日の事は私の頭にこびりついております。家族にとっては「青天の霹靂」の出来事でした。父の居ない留守宅には母と弟と2人きりになり、私、姉も2人居なくなると家族がバラバラになってしまうので、急ぎよ祖父の郷里である花巻に残された家族4人で疎開する事になりました。

〈中略〉

曾祖父の時代に「分家」（＝「かまど」と言っていました）になられた同姓の佐藤さんと言われる方達のお世話になりました。一日市裏の「心厚屋さん」佐藤セキさんの家の近くには借家が見つからず、取りあえず花巻温泉の松雲閣の別荘（駅から松雲閣へ行く道の両脇に〇〇号館と何軒か並んでいました）その中の向い左側の一軒家に入りました。そこから電車通学が始まりました。

4年生の2学期、夏休み明けからです。鈴木キヨ先生とおっしゃる担任の女子のみのクラスでした。当時は男・女別々でしたが、朝礼では男女一緒に全校生徒全員が上半身裸になって校庭で乾布摩擦をしました。

〈中略〉

教室には赤ちゃんをおんぶして来ている生徒がいました。当時農家の男性が戦争に行ってしまう、残されたお母さん達の手伝いに子守りをしながら学校に来ていたのでしょう。勉強など出来るはずもなく、放課後帰宅方面が同じ者同士グループをつくり勉強を教え合ったりしました。

坂を登って学校へ行く途中、右側の畑の向こうに小屋があって煙が立っていましたが、亡くなった人の焼場でした。教室に煙が入って来ていました。何だかこわいし、気持ちが悪かったです。

冬、寒くなって電車通学で家に帰ると、一日中流れている温泉があり、お湯につかって暖をとって気持ちよく過ごしていましたが、銃後の家族（父、兄など戦争に行っている家）の私達は、ぜいたくは許されませんが、なかなか借家が見つかりませんでした。やっと一日市裏に小さな家を貸していただき移り住みました。

表通りの豆腐屋さんが、同じクラスの安恒レイさん（後にお花の先生で市役所におつとめでした）その大分なめ向いには鍛冶屋さんがあり、馬の蹄をつかえていて、いつも馬が入っていました。そこが小原こうさん（こっちゃん）のお店で（後に花巻中学？高校の野球監督さん、3人兄弟）でした。

水道はなくて掘り抜き井戸（？）があちこち家のそばにあり、水が流れていました。我家にはなくて、遠くに汲みに行っていました。大変でした。

冬になり、雪が降り、学校に行く長靴やゴム靴がなくて、わらで作ってもらいましたが雪がついて全部は取れず、かわかす暖房のための炭など燃料がなく、翌朝、雪が氷になっていて、学校に行く坂道がこわくて休んだりもしました。手も足も顔の両頬までコリコリとしもやけになり辛かったです。炭もなく、分家にもらいに行ったりもしました。

家にはお風呂もなかったのでキセさん宅にもらい湯をして外にでると、手拭いがすぐにパンパンに凍っていました。

戦後、昭和22年3月、6年生卒業まで居りましたから食糧難も大変でした。荒地を開墾して、やせた土地でも出来るという、そば、ごまなど収穫して学校で一度食べた事もあります。

山から炭一俵かついで降りる途中、夏ですが道端のたまり水など飲んだ事もありました。

〈中略〉

21年の夏、戦地から父が無事に引き上げてきました。東京の家が焼けてしまった事も、私達が花巻に疎開していた事も知らずにびっくりしておりました。無事に帰って来られたのは、南方の島方面ではなくて、今の中国、当時は支那の南支か中支か北支へ行って戦っていたそうで、幸いに戦死せずに無事帰還出来ました。

父が帰りましても私達は東京に帰る家もなく、昭和22年3月花巻小学校を卒業して、姉は女学校、私は中学校へ東京の焼け跡の一角に父の妹が建てたトタンのバラック（お風呂はドラム缶）に預けられ、姉は寄宿舎に入り、東京の私学に入学しました。

現在は嫁いで関西に居りますが、花巻は私のふるさとです。いつも懐かしく思い出

され、特に終戦記念日が近づくと忘れられません。(後略)

4. まとめ

昭和20年8月10日の花巻空襲では、花巻駅と似内駅を中心に激しい爆撃と機銃掃射が行われた。また、現在の上町、豊沢町などの広い範囲が火災により焼失した。1時間程度の攻撃によって40名以上の犠牲者がでた。この只中の様子を釜津田さんと横田さんの証言から窺うことができる。

釜津田さんの証言からは、当時仲町にあった防空壕の存在や、そこに多くの人が避難していたことが分かった。「病院の患者さんたちもみんな入っていた」というのは、近くの厚生病院の患者だと思われる。また、横田さんのお話のなかで近所の女性が空襲直後に「アメリカ兵が上陸して来るから早く逃げねば」と声をかけたというお話からは、当時の混乱の様子を見て取ることができる。

戦時中の学校の様子も興味深い。疎開してきた子どもが多くいたこと、行軍訓練や避難訓練が行われたこと、物資不足でテストのための紙を各自で用意したことなど、教育の現場にも戦争が暗い影を落としていたことが分かる。

戦後80年を迎え、こうした戦争の体験談を聞くことが難しくなっているなか、釜津田さんと横田さんには、貴重な機会をいただいた。この体験談は今後の平和学習や展示活動などで有効に活用していく事になる。

今後は、体験した本人のお話だけでなく、その家族が伝え聞いた話なども収集の対象となっていこう。戦争がどのように語られ、それが家族や周囲の人々にどのような影響を与えたのか見ていく必要がある。今後も体験談の収集を行っていきたい。

謝辞

貴重なお話をお寄せいただいた、釜津田啓子さんと横田元子さんに改めて感謝申し上げます。

花卷市博物館研究紀要

第21号

令和8年3月31日 印刷

令和8年3月31日 発行

発行 花卷市博物館

〒025-0014

花卷市高松第26地割8-1

TEL 0198-32-1030

印刷 八重樫孔版社

〒025-0071

花卷市愛宕町8-8

TEL 0198-23-2544

©花卷市教育委員会

Research Bulletin
OF
HANAMAKI CITY MUSEUM

The periods when the pictorial maps of the Hanamaki Castle were drawn and the transitions of the rooms in the castle

..... Yoshikuni NITANAI (3)

About the Hanamaki situation in the early Meiji Era that Christian missionaries wrote

..... Ichiro FUDAI (29)

About collecting wartime experiences - On the occasion of 80 years since the end of the Pacific War

..... Kasumi MATSUHASHI and Yuki MIURA (39)

EDITED
BY
HANAMAKI CITY MUSEUM